
鬼奇譚

山羊ノ宮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鬼奇譚

【Nコード】

N0873N

【作者名】

山羊ノ宮

【あらすじ】

鬼が来ると言われている鬼門とは丑寅の方角にある。故に鬼の姿は牛の角を持ち、虎の毛皮を身にまとう者とされているのであった。

災厄の象徴として忌み嫌われる鬼。これはそんな鬼の住む世界の物語。

隻腕の鬼

鬼が来ると言われている鬼門とは丑寅の方角にある。

故に鬼の姿は牛の角を持ち、虎の毛皮を身にまとう者とされているのであった。

災厄の象徴として忌み嫌われる鬼。

これはそんな鬼の住む世界の物語。

「お嬢ちゃんの一人旅なんて感心しないねえ」

下卑た笑みを浮かべた男達が一人の少女を囲んでいた。

どの世界にもこの手の下種な男達は存在する。

しかし、少女は男達に怖じる様子はなかった。

恐らくその心根を支えていたのは腰に携えていた刀。

それに少女は手をかけようとしていた。

鳶色の瞳、長い黒髪を赤い紐で一本に後ろでくくっている。

身なりはそこそこに良く、男達にしてみればよいカモに見えたであらう。

「悪いことは言わねえ。身ぐるみ置いてきな。そうすりゃ命までは取らねえ。ただちよつと俺達と遊んでもらうかな」

「へえ。それじゃあ俺とも遊んでもらおうかな」

男達にかけられた突然の声。

何だとはかりに男達は声の主をにらみ付けるが、相手を見るなり顔色が見ると変わっていくではないか。

男達に視線の先に立っていたのは二メートルほどもある大男。

手には男達の背丈ほどの金棒が握られ、その男が尋常な者でないことを物語っている。

にたりと笑う大男に恐れをなしたのか、男達はすぐさま蜘蛛の子を散らすように逃げていった。

「なんだよ。遊んでくれるんじゃないのよ」

つまらなそうに大男はぼやいた。

「危なかったな。なに、礼はいらねえ・・・」

少女は逃げていった男達を見送ると大男を一瞥し、その場を去ろうとした。

「つて、おいおい。本当に助けてやって礼の一つもなしかよ」

「・・・助けてもらう必要など無かった。いらぬ世話だ」

「いらぬ世話つて・・・可愛くねえ」

そんな文句も気にした様子も無く立ち去ろうとする少女。

可愛くねえが、と大男は嘆息する。

「このまま死なれても寝覚めが悪いか。おい、嬢ちゃん。この先行くのはやめときな。この先の村で鬼が暴れていると聞く。悪いことは言わねえ。さっさと帰るんだな」

びたりと少女の足が止まり、大男を振りかえった。

「その話詳しくきかせてもらおうか？」

「は？何の話だ？」

「さっき言った鬼の話だ」

「聞いてどうするよ」

「無論斬る。そのために私はここまで来たのだ」

少女は刀を抜き、すごんで見せるが、大男は腹を抱えて笑い出した。

「嬢ちゃんの細腕で鬼を斬るだつて？それにその歪んだ壊れた刀でか？冗談。腹いてえ」

「安綱は壊れた刀ではない。これは反りというものだ。この刀は鬼を切るためにわざわざ作ってもらったものだ」

「安綱つてその刀の名か？」

「いかにも」

また大男は大きく笑う。

「刀に名前つけて本当にままごとだな」

笑い続ける大男に少女は鼻を鳴らす。

そして、刀を収め、また歩み出そうとした時、大男に腕を掴まれ

た。

その膂力くちからは強く、引き？がす事もまして刀を抜くなどできずにいた。

「やめときな。真面目な話、鬼の体は刃を通さねえ。そんな刀じゃ無理だ。諦めて帰るんだ」

大男の口ぶりは先程の快活な物言いとの違い、冷めた口調であった。

「それこそこんな金棒でぶん殴るしか鬼を倒す手段はねえんだよ。そんなのあんたにや無理だろ？」

「帰る所など・・・」

「ん？」

「帰る所など無い。親は鬼に殺され、私は天涯孤独の身だ。この手で仇を取るまで私に安寧の場所などこの世の何処にもない」

涙を浮かべながらも力強く見上げる瞳。

やがて根負けしたように大男から大きく息が漏れた。

「じゃあ、好きにしなよ。けど、どうなっても俺は知らねえからな」

「元よりそのつもりだ。私の好きにする」

「・・・やっぱり可愛くねえ」

そう言って大男は帽子の上から自身の頭を激しくかきむしるのであった。

そして、二日ばかり二人は歩き、鬼がいると言っ村にたどり着いた。

「鬼は俺が倒すんだから邪魔すんなよ。嬢ちゃん」

「邪魔なのはそちらだ。仇討ちの邪魔はしないで頂こう」

「相変わらず可愛くねえなあ。そんなだと助けてやらねえぞ」

「助けていただかなくて結構。そちらこそ足手まといになるから出しゃばつてこないで頂こうか」

二人は喧嘩しながら村に入る。

そして、別々に潜んでいる鬼を探すこととなった。

数刻後、少女の足が止まった。
安綱を抜き、構える先には民家。
そこには求めていた相手がいた。
真白の肌、獅子のたてがみの様な髪の中に見える大きな二本の角。
金色の瞳がギロリと光っていた。
虎の毛皮を身にまとうその姿は、まさしく鬼の姿である。
鬼を目の前にして少女は震えていた。
振るうべき腕も踏み出すべき足も動けないでいた。
出来たのはただ

「きゃあああああああ！！」
叫ぶだけ。

鋭い鬼の爪が少女をめがけて襲いかかる。

「はい。あなたの相手は俺だ」

鬼の腕は金棒によつてはたき落された。
続けざまに払い、飛ばされた鬼は民家を破壊し、瓦礫の中に沈んだ。

「邪魔をするな。あれは私の・・・」

少女の強がりを見無視して、大男は再び金棒を構える。

瓦礫の中から一陣の風。

鬼の姿が大男の目の前にあった。

俊敏な動きで放たれる突きを金棒で次々にはたき落していく。

やがて腕の動きは鈍くなり、鬼の体にも隙を見て大男は一撃を当てていくが、決定的な一撃にはほど遠かった。

長期戦が予想されたが、打開の一手はすぐに訪れる。

「覚悟！」

そう言つて、少女は鬼の背後から斬りかかった。

安綱は鬼の肩口を斬りつけ、鮮血が飛ぶ。

しかし、いかんせん少女の力である。

その刃は鬼の体を傷つけるも致命傷とはいかなかった。

そして、邪魔だとばかりに少女は吹き飛ばされた。

「きゃあああああ！！」

民家の柱に打ち付けられる寸前で、大男が少女を抱きかかえ、事なきを得る。

「すまん。大丈夫か？」

「大丈夫。これでも俺は丈夫なんでね」

とは言え、得物を少女を助けるために放って来てしまっている
そこで大男が目を付けたのは安綱。

「確かに鬼の体を斬りこめる代物らしいな。それは」

「当然だ。これは・・・」

「じゃあ、ちつと借りるぜ」

「おい！」

少女の制止を聞かず、大男は安綱を握り、再び鬼と対峙する。

大男が飛び込めば、振りかぶられる鬼の腕。

その腕は大男の頭をかすめ、帽子を飛ばすだけ。

懐に飛び込んだ大男は鬼の両の太ももの腱を斬りつけ、動きを封じる。

膝を着く鬼に容赦なく続けて一撃、左の腕を斬り飛ばした。

鬼はたまらずうめき、無くなった左の腕の付け根を押さえる。

いよいよ止めというところで少女が大男の服を引っ張る。

「なんだよ。嬢ちゃん。最後は自分の手でやりたいってか？」

「そうじゃない・・・お前の頭」

大男は少女の言わんとしていることに気がついて、ばつが悪そうに頭をかく。

そこには角があった。

「ああ、俺も鬼だよ。ついでに言うならこいつは俺の親父だ」

「お前は自分の父を殺そうとしていたのか！」

「そうだ」

少女はうめく鬼と大男を見合わせる。

「何故？」

問わずにはいられなかった。

「親父は鬼の血の呪いに負けて、理性が飛んじまってる。誰かが殺らなきゃなんないんだ。だったら息子の俺が殺るべきだろ?」

自嘲する大男に少女は立ちはだかる。

「そんなの間違っている！実の親子で殺し合いなど！」

「・・・もういい。どけ、嬢ちゃん。どかなきゃ嬢ちゃんも殺るぞ」「どかない」

「・・・全く、可愛くねえ」

そう言いながらも大男は安綱を構えるのを止めた。

しかし、まだ終わってはいない。

「危ねえ！嬢ちゃん！」

襲うために伸ばされる親鬼の手。

守るために伸ばされた大男の手。

それらは組合い、

「ぐわわああああ!!!」

大男の腕を力任せに引きちぎった。

膝をつき、うめく大男。

同じくうめきながらも暴れようとする鬼。

両者を見つめ、少女は決意する。

「すまない・・・」

少女は地面に落ちた安綱を拾い上げ、

「だが！」

鬼の瞳に突き刺す。

体重をかけ、渾身の力で押しこむと鬼は絶命した。

そして、息も絶え絶えに片腕を引きちぎられた大男に近づく。

「大丈夫か？」

返答はすぐに帰ってこず、心配して少女は大男を覗き込んだ。

聞こえてきたのは嗚咽。

「親父い・・・ああああああ!!!親父いい!!!」

大男は天に向かい、大声を上げ、泣いた。

空は青く、何事も無いように雲は流れていた。

墓が作られていた。

墓前にて二人は立ち尽くす。

大男は酒を取り出し、口に含み、墓にかけ、酒を酌み交わす。

「すまない」

「気にするな。親父も理性飛んで、ああなっちまったらお終いだつたんだ。きつと殺されて喜んでる」

「そうか・・・ありがとう」

「んだよ。ちゃんと礼が言えるんじゃないかよ」

「礼ぐらい・・・」と言いかけて少女は言い淀んだ。

恐らくは初めて会った時の事を思い出したのであろう。

そんな様子に大男は苦笑する。

それに少しムツとして見せる少女。

「そう言えばお前の名を聞いていなかったな」

「そう言えばそうか？確かに。言っただけじゃなかったな。俺の名は大江だ。嬢ちゃんは？」

「光だ」

そう言っただけで光は土で汚れた顔で笑って見せた。

「・・・なんだよ。笑うと結構可愛いじゃないかよ」

「何か言っただけ？」

「いや、何も」

「そうか。それで大江。もし良かったらお前も私と一緒に来ないか？」

「一緒に？」

「私の親を襲った鬼は頭に四本の角があると聞いている」

「それじゃあ・・・」

「ああ。お前の父上は私の仇では無かった。だから、まだ私の旅は続く。そこでお前の力があれば心強いのだが・・・」

呆気にとられていた大江であったが、やがてにたりと笑う。

「どうしても言うなら」

「ああ、どうしてもだ」
そう言って二人は声を上げ、笑いあった。

橋の上の再会

「さすがに都となると人も多いな」

朱塗りの欄干に背を預け、大江は感嘆の声を上げる。

大江と光は都に来ていた。

もちろん四本の鬼のを求めてのこと。

同じ鬼である大江であったが、四本の鬼の話は聞いたことはないというので、鬼のうわさを頼りに一つ一つ当たっていくしかなかった。

橋の上の往来は激しく、活気に満ちていた。

「どうしたよ、光？」

大江は落ち着きない光に一声かける。

「そんなにきよるきよるしてたら田舎者丸出しだぜ。まあ、珍しいのは分からもないがな」

「違う！私はただ知り合いがないかと・・・」

「はん？知り合い？確かお前天涯孤独の身じゃなかったのかよ」

「それはそうなのだが・・・」

と光が言い淀んでいると、何処からか光の名を呼ぶ声が聞こえた。「やっぱりあいつだ。あいつは幼い頃から私を見つけてるのがうまくて、何処にいても見つけてくるんだ」

人目を気にせず、光の名を叫びながら駆けてくるのは美少年。

その身なりもしつかりとしていて、その場にそぐわない高貴な者であるに分かる。

「光様！・・・はあ、はあ、はあ・・・探しましたよ！今まで一体何処にいたんですか？都じゅう探したのに見つからなくて。僕がどれだけ心配したと思っっているんですか！」

「す、すまん」

光は小柄な身を大江の大きな体躯に隠しながら、美少年に謝る。

「さあ、一緒に来てください！」

「こそこそと隠れようとする光の手を無理やりに掴もうとする美少年。」

すかさず大江が割って入る。

「おい、坊ちゃん。光が嫌がってんじゃないか。止めなよ。」

「なんだお前は？邪魔をするな。それに光様を気安く呼び捨てるとは。一体何者だ？」

「夫だ」

ぼそりと言う光の言葉に男二人は動揺する、

「ばっか、何言ってるんだ。光！」

「おっ・・・と」

大江が見ると、美少年は涙をぼろぼろ流し、呆然自失であった。

乾いた笑いが漏れている。

「いや、なんだ。これは光のちょっとした冗談だ。ああ、光は冗談が下手でな。いつも笑えない冗談を言うんだ。気にするな。うん」

「冗談ではない。正真正銘大江は私の夫だ」

「おい！光！」

激昂する大江の襟元を引きよせ、光はこそこそと耳打ちをする。

「すまん。だが、これしか奴から逃れる術がないんだ。協力してくれ」

「協力つて・・・いいのか？こいつものすごく動転してるぞ」

「構わん」

「なら、いいが。ちゃんと後で説明しろよな」

「無論だ」

内緒話を終え、大江は一つ咳払いをする。

そして、美少年の肩を叩いた。

「すまん。光は俺の嫁だ」

するとみるみると美少年の顔が歪む。

仕舞いに声を上げ、泣きだし、その場から去っていった。

その光景を見送り光は一息つく。

「ふう、行ったか」

「行つたかじゃねえ」

ゴチンと光の頭が叩かれ、光は撃沈する。

「痛いじゃないか！」

「当たり前だ。痛くしたんだからな。まったく、男泣かすたあ、とんだ悪女だな、お前は」

「仕方ないだろ。あのまま連れて行かれる訳にはいかなかったんだ」
頭をさすりながら、目線を落とす光。

その目には涙が。

もちろんに痛みによる涙ではある。

「で、訳を聞かせてもらおうか？」

「訳・・・か？」

「説明すると言つただろうが」

「そうだったな。うーむ。何から話してよいものやら」
思索している光。

沈黙を待ち切れずに大江が逆に質問をする。

「あの坊ちゃんは一切何者なんだ？光の事をよく知っていたみたいだが」

「綱か？綱は私の家に仕えていた家の者で、幼い頃からの知り合いだ。私が親を亡くした後、後見を申し出てくれたが、断つた」

「何で？いいとこの坊ちゃんだろうが。それにお前もそうだったんだろ？」

「皆まで言わせるな。もちろん親の仇を討つためだ」

大江は大きくため息をつく。

「光。今からでも遅くねえ。坊ちゃんところに行きな」
「なっ?!」

「お前の仇の四本の角を持つ鬼だったか？そいつは俺が見つけたら倒しといてやるよ。だから、お前が戦う必要はねえ」

「馬鹿言つな！そんなことできる訳ない！」

「わがまま言つなよ。光。お前もこの間鬼と戦った時思つただろ。自分じゃ太刀打ちできないって」

「・・・お前だつて肩腕じゃ」

「それなら光の安綱を貸してくれ。それで肩腕の代わりになるだろ」
光は腰に携えた鬼切の刀、安綱を見てやる。

「・・・お前もあの方と同じような事を言うのだな」

「あの方？」

「私の命を助けてくれた宮仕えの陰陽師だ。あの夜、偶然にも我が家の近くを通りがかったそうさ。そして、鬼気を感じ我が家に踏み込んでくれたのだ。もしあの方が来なかったら私の命はなかった。あの方は言った。私の親の仇は自分が討つと。けれど、待てど暮らせどそんな一報は来ない。もうそんな約束忘れていいのかもしれないな。いや、もしかしたらその場限りの慰めの言葉だったのかもしれない」

「光・・・」

「だからな、大江。私は旅に出たんだ。人を頼るのはもうやめたんだ。私の力が例え及ばないとしてもそれでも何もしないよりはましだと思つたんだ」

大江は光の言葉を噛みしめ、「分かった」と言った。

「そうか」と光も笑み、答える。

「とりあえずは夜を待つか？」

「そうだな。この橋に出ると言う女鬼とやらを待とう」

橋の上の女鬼

宵闇は月光によって切り裂かれ、舞台に明かりを灯す。
人通りはない。

ある気配は光と大江、そして、それに相對する者の気配だけであった。

「たしか話によると橋に出てくる鬼は絶世の美女で、その姿に油断している」と一変して美女は鬼の姿に変じて、襲ってくるという話だったよな」

「そうだ」

「鬼の姿は巨大で、その怪力は地を割るとさえ言っていた。そして、なぜか屈強な男ばかりが狙われていると言う」

「そう言う男が趣味の鬼なのだろうな」

「で、重要なのはここからだ。あれか？あれなのか、その女鬼というのは？！」

大江が指差す先には女がいた。

いや、女の子と言うべきか。

幼いその子は準備運動をしながら、光達の様子をつかがっていた。「話はもう終わったべか？」

幼女は虎革の両の小手を合わせ、打ち鳴らす。

その音からして、どうやら小手の中に鉄の板を仕込んでいるようだ。

長い赤毛を両脇でくくり、元氣の良いその髪は二本のアホ毛をすくすくと育てている。

見ようによっては、そのアホ毛と角とで四本の角に見えなくもない。

「正直コブつきとか、オラは用はないんだべ。さつさとやられるべ」

「光。コブつきだとよ。どうやらお前を俺の女だと思っているらしい、昼間の続きみたいだな」

「ふん。気色の悪い冗談だ。吐き気がする」

「なんだ？つわりか？」

「・・・大江、斬るぞ」

光が抜刀しようとして、慌てて大江が釈明する。

「ま、待て。ちょっとしたお茶目な冗談じゃないか？」

「お前に茶目つ気など必要無い」

「なんだ？痴話げんかだべか？ノロケならどつか他所でやって欲しいべ」

光達の漫才に幼女は肩をすくめる。

「・・・大江」

「なんだ？光」

「あの子鬼。曲がりなりにも鬼だ。それも人に迷惑をかける悪い鬼だ。ここは灸をすえる必要があると思うが」

「でもよお。俺、ガキをいじめる趣味ねえよ。気が向かねえな」

やる気のない大江。

それを見て幼女は鼻で笑う。

「ぐだぐだ言っでないで早くかかってくるべ。どうせお前みたいなザコ、一撃粉碎だべ」

「はあ？俺がザコだと？このガキ、誰に物言っでんだ？」

「ザコに言っでるだべ。臆病者の木偶の坊に言っでるだべ」

「んだと！そんなに言うなら一回痛い目にあわせてやるよ。お仕置きされて泣きだすなよ、ガキ」

大江にもやっと火がついたのか、金棒を構える。

「やっとだべ。前振り長くて疲れたべ」

トントんと跳躍をし、幼女は拳を構える。

そして、一瞬にしてその姿を消した。

大江は追い切れず、周りを見渡す。

そして、上空を見上げた。

「残念。下だべ」

不意な声と共に懐に飛び込んでいた幼女。

大江はとつさに防御しようとしたが、間に合わない。
幼女の振り抜く拳は大江の股間を貫いた。

「ぐっわっ……」

うめき声一つ、大江は轟沈した。

「やっぱり弱いべ。オラの瞬殺だべ」

「くそつ。童と思つて油断したか」

大江は命に別状ないようだが、戦闘にはすぐに復帰できそうにな
い。

光は嫌な汗を拭い、鬼切の刀、安綱を抜く。

構える光に幼女は拳を収めた。

「止めとくべ。オラは女には手を出さないべ」

「……女は弱すぎて相手にならないと？私ではこの大江の足下にも及ばないとも思っているのか？ふん。だがしかし、この安綱をもつてすれば……」

「違うべ。女じゃ戦つて、負けても結婚できないべ。それじゃ意味無いべ」

「結婚？」

「そうだべ。オラの理想はオラより強くて、カッコよくて、それでいて優しい男だべ。オラはずつと村でそんな男が現れるのを待つたべ。けど、全然オラのここに来てくれないんだべ。仕方ないから都まで迎えに来たんだべ」

「それで強そうな男を片っ端から」

「そうだべ」

呆れてものも言えぬとはこの事であつた。

もはやこの幼女が光の親の仇でない事は明白である。

「なんでも最近ある村で大暴れした鬼を退治したすごいカッコイイ人がいるそうなんだべ。きつとその人がオラの旦那様だべ。容姿は女みたいに綺麗で、そのくせ大人の身の丈ほどもある金棒を振りまわすような豪の者。ものすごい強い鬼を一合でたたき斬つたそうだべ。そして、絶対その方は優しいに決まってるべ」

「・・・鬼退治をする者なら、鬼の敵ではないのか？そんな者との恋愛など・・・」

「愛に鬼も人間も無いべ。少しぐらいの障害があつた方が逆に燃えるべ！」

幼女の話の聞くに恐らく大江と光が混ざり、噂話が独り歩きしている様だつた。

恐らくこのままこの幼い女鬼を放置しておけば、幻想の男を追い求め、ずっとここで人を襲い続けるのだらう。

とは言え、どう切り出したものかと光は思案する。

「・・・あのな、童よ。実はその男、實在せんのだ」

そして、結局素直に真実を述べるのが良いだらうという結論に達する。

「はい？何言つてるべ？」

「そこに転がっている大江の得物は金棒。そして、私達はある村で理性を失い暴走していた鬼を退治した事がある」

幼女は目を丸くして、大江と光を見合わせる。

「これはあれだ。噂に尾ひれがという奴だ。実際は命からがらの勝利であつたし、そのような英雄の様な男もいない」

詳細に事の顛末てんまつを語る光。

その言葉に幼女はわなわなと震えていた。

「・・・騙したべ」

「そうそう、分かってくれたか。そう、私達はそなたを騙し・・・つて違う！私達はそんな・・・」

「乙女の純情を踏みにじる悪辣あくれつなその業、ここでオラが叩き潰してやるべ！」

「違う。落ち着け、童。話を聞くのだ」

「問答無用！！」

すさまじいまでの鬼気を放ち、怒りの形相の幼女。

仕方ないと光は安綱を構える。

しかし、幼女の拳が光の方に向かってくる事はなかった。

なぜなら幼女の首根っこをひよいとつまみあげる者がいたからだ。
「綱!？」

「何をやっておいでなのですか? 光様。このような所で童相手に喧嘩とは、それも刀まで持ち出して」

不意の事で捕まえられたが、すぐさま幼女は体をひねり、綱の手から離れる。
「どうしてここに?」

「光様、この綱、これよりお側に侍ることをお許してください」
「はい?」

「これまで光様を仇打ちより遠ざけるように身を案じてきました。しかし、それは僕の自己満足でしかなかった。僕は悟ったのです。僕は光様の覚悟を図れてはいなかった!」

「お、おーい。綱」
「これより僕が光様の剣となり、盾となりましょう。ご安心くださいませ、光様。必ずや、光様の仇討ちを成功させて見せます」
「いや、私は大江という夫がいてな。だから綱に助けてもらわなくとも・・・」

「その事ですが、あの時は突然の事で気が動転しましたが、よくよく考えればおかしい。きつとあの男は光様の夫ではなく、用心棒か何かでありましょう?」

「そ、そうではない。正真正銘あれは私の夫だ」
怪しむ綱に光は視線を合わせようとはしない。

「ここは女鬼が出ると言われている橋。姿も見せず光様を一人こんな所で置いておくようなものがどうして夫でありましょうか?」

「いや、綱。大江ならそこで倒れておる」
「何と、そんなところで酔いつぶれているのか! ますますもって不届き千万」

「違う。あれはな、鬼にやられて・・・」
「なんと! もう鬼の魔手がすぐそこに・・・光様、ご安心を。この綱、命に代えてもお守りいたします。さあ、来い鬼よ。鬼切の刀、

安綱の兄弟刀、この膝丸にてお相手致そう!」

張り切り過ぎて、空回りしている綱を見て、どっと疲れが出てくる光であった。

「綱。その鬼はそこにおる」

光が指差す先には幼女。

幼女は拳を構えたまま、頬を紅潮させ、綱をぼんやりとした眼で見つめていた。

「この童がああ噂の鬼でありますか?確かに角があるようですが・・・」

信じられぬと綱が幼女を見つめると、幼女は恥ずかしそうに視線を外すのであった。

「・・・か、カツコいいべ」

「は、はあ」

「そ、その・・・あなたにお願いがあるべ!」

「お願い?」

「その刀でオラの頭をゴチンてやって欲しいべ」

変な願い事をされ、不審がる綱。

視線を光にやると、光は頷くので、仕方なしに綱は刀の背で幼女の頭を叩いた。

「や、ら、れ、たべえええ」

わざとらしく崩れ落ちる幼女。

訳が分からない綱に光は肩を叩いた。

「やったな、綱。鬼を退治したぞ」

「は、はあ」

「そして、鬼退治の報酬にオラを嫁にもらえるべ!」

「はあ?!」

「良かったな、綱。嫁の一人もいないでおば様も心配しておつたろう。これで家も安泰だな」

「ちよつと待つてください!光様!何がどうなって・・・」

「達者で暮らせよ」

抱きつく幼女に翻弄される綱を放つて、光は大江の元へ足を運ぶ。

「待つてください。光様！」

「そうだな。子供は多い方がいいだべ。綱様が望むなら、十人でも二十人でも作るべ」

「そんな話はしていない！ちよつと君、放してくれ。僕にはこれから光様を守ると言う使命が……」

「君だなんて、よそよそしいべ。オラの名はアイだべ。綱様を愛するのアイだべ。覚えやすいべえ」

「光様ああ」

大きな嘆息をついて、光は大江を見る。

「おい、大江。いつまで寝ているのだ？」

返事はない。

大江は白目向いたまま、泡を吹いていた。

「使えないな」

そう言つて、光は大江の腹を蹴飛ばし、気付けするのであった。

足柄山の鬼

「この足柄山あしがらやまに坂田金時さかたのきんときなる男がいます」

「その男が鬼であると?」

光の問いかけに綱は頷く。

山道は人が歩けるように固められてはいるが、慣れぬ者には少しばかりつらいようで綱は息が切れていた。

「この男、幼き時に熊と相撲を取ったと逸話がありまして、にわか信じがたいのですが、もしや鬼ならばと思つた次第なのです」

光は考え込む。

親の仇である可能性は低そうではあるが、どうしたものかと。

もし鬼であるのならば、もっと早くに問題になっているだろうし、それこそ人を襲つようならなおさらである。

他に有力な情報がないとはいえ、このようなシラミつぶしではないつになつたら親の仇と出会えるか分からない。

思い悩み、真剣な表情をしていた光だが、やがてひくひくと顔が歪む。

「うるさい!」

「だつて〜!」「だつてよー!」と大江とアイが声をそろえて弁明する。

「何だつてこんなガキ連れて行かなきゃならないんだ?役に立ちやしないだろう」

「そのガキに一撃で倒されたのは何処の誰だべ?」

「あれはたまたま・・・」

「次は確実に玉無しだべ」

「ごきりと指を鳴らし、アイは不敵に笑んだ。

男性陣二人に背筋に冷たいものが走り、ぞくりとする。

「幼子といえど、やはり鬼なのですな。恐ろしい」

「大丈夫だべ。綱様にはそんな事はしないだべ。玉潰すのはあそこ

の木偶の坊だけだべ」

綱の機微に気付いたアイはすかさず綱の背に飛びつき、耳元に囁いた。

綱は「そうですか」と苦笑いする。

「ですが、君の様な女の子が玉とか連呼するのはいささか破廉恥すぎやしませんか？」

「そうだべか？玉は下品だべか？・・・でも、綱様がそう言うならあんまり言わないようにするだべ」

綱はその言葉に満足そうにうなずき、光はどうでもいいなと無視した。

「でも、綱様も直さないといけない所あるべ」

「直す所？」

「オラの事は君じゃなくて、アイって呼ぶだべ」

「・・・アイさん」

「うゝん、綱様の恥ずかしがる姿、たまらないべ。なんて奥ゆかしいんだべ」

「ち、ちがう！これは・・・」

道連れが二人増えただけでこんなにもぎやかになるのかと光は辟易していた。

とても親の仇打ちの旅とは言い難い。

大江との二人旅の時はお互いが距離を推し量り、軽口を叩こうと目的は常に念頭にあった。

図らずとも大江の父に止めを刺したのは光である。

それを大江は責めたりはしないし、むしろ感謝の言葉が出てくるけれど、やはり光には後ろめたいものが残っているのだ。

もちろんそれに気づかぬ大江ではない。

だからこそ、踏み入れてはならない一線が明確にあったのだ。

しかし、綱にしてもアイにしてもズカズカと人の心に土足で入り込むような無作法な所がある。

それは捉えようによっては良いところであったが、光にしてみれ

ばそれは出来れば距離を置きたいそんな性質であった。

親の仇を討つために固めた悲痛な覚悟がふやけていくような、そんな恐怖を光は感じていた。

「光！」

「光様！」

光が思考の海で漂っていると、大江達に引き戻された。

現の世ではばきばきと音を立てて、木が光めがけて倒れてきていた。

「おおーい。倒れるぞー」とそんな声が今更にどこから聞こえる。ぐいっと光の体が大江の太い腕に引つ張られた。

ドスン。

木が光の目の前で土煙を上げる。

「あ、ありがとう」

「ん？今日はやけに素直だな。どこか調子が悪いのか？」

「どこも悪くない！もう放せ！」

キョトンとしている大江に対し、光は不条理な怒りを振りまいていた。

「光様！」

木の向こうには同じくアイに助けられた綱の姿があった。

綱の悲痛な叫びがこだまする。

別段怪我をしている様子もなかったが、ちょうどアイに押し倒された形になり、綱にとつての危機は脱していないようだった。

何故か馬なりのアイからはよだれが流れ落ちている。

どうでもいいなと光は無視した。

そして、木の倒れてきた方角を向いた。

「悪い悪い。いや、人がいるとは思わなかったものだから、声をかけるのが遅れた。大事ないか？」

木の倒れたところから現れたのは男。

大江よりは小柄だが、十分に巨漢と呼べる。

人懐っこい笑顔を見せ、怪我がない事を本当に喜んでいるように

見える。

「すまん。この木は邪魔だな。ちとどいてもらえると嬉しい」

「男はよつと声を上げ、倒れている木を掴みにかかる。

そして、それをひょいと抱え上げた。

光達はその怪力に驚愕し、同時に怪しんだ。

男の頭には角はない。

大江と光はお互い顔を見合わせ、どういふ事だとひそひそ話をする。

「角の無い鬼などいるのか、大江？」

「いや、俺は聞いたことねえな。でも、目の前の奴が自分で鬼だと言うならそれもあいかとは思ふ。どっちにしたって人間業じゃねえだろ」

「確かに」

恐らくそうであろうと答えを持って光は男に名を尋ねる。

「坂田金時。この山で木を切り、材木を売って生活している」

やはりと光達の答えは確信に変わった。

「失礼。実は貴公に用があつて我等はここに來たのだ」

「ほう。俺なんか何の用があつて」

大江達に割つて入つたのは綱。

どうやらアイの呪縛から何とか逃れたらしい。

一方アイはと言うと地べたに座つて、目をつむり、顔を上げて、何かを待つているような様子である。

大体どんなやり取りがされたのかは想像が着いた。

「不躰で申し訳ないが、貴公は鬼か？」

一瞬、顔がほづけるが、すぐに坂田は快活に笑う。

「鬼かと問われれば、違つと答える。鬼の様な男かと問われれば、何ともいえんが、自分ではそうではないと思つてゐる。俺は何処にでも転がっている筈にも棒にも引つかからぬ男よ」

倒木を一人で抱え上げるような男は何処にでも転がってはいない。常人では無い。

だが、

「はずれか」

「俺には何とも言えんなあ。俺が知らないだけで角を隠せる方法があるのかもしれねえし。それに鬼かと問われて鬼だと答える奴はいないだろ。それこそお前は人殺しなのかと問い正してみても同じだろ？」

「もう少し探る余地はあると言う事か」

光と大江は顔を見合わせ、ついで山の頂上を見ていた坂田を見てやる。

「悪いがこつちもあんたらに用があるようだ。ちと来てくれんか？」

「用？どういふ事ですか？」

「俺の嫁があんたらを呼んでいる。どうせだ、俺んちで茶でも飲んでけ」

肝心の用件は何かと再度問いなおしても来れば分かると、坂田は笑う。

さて鬼が出るか、蛇が出るか。

そんな心持ちで光達は坂田の後について行った。

狐の嫁

そして、坂田の家に着いた。

「さあ、中で俺の嫁が待っている」

坂田は戸を開け、光達を家に招き入れた。

光は家に一步踏み入れ、はたと立ち止まる。

家の中には女がいた。

恐らくは坂田の妻であろう。

ただその女は普通の女では無かった。

美しい女であった。

それこそ同じ女である光が見惚れるほどに。

長い髪の本一本が艶めき、切れ長の目は妖しく、身なりを整えれば、天女だと言い張ってもおかしくないほどである。

光が誘われるように一步踏み出そうとすると、目の前を太い腕が遮った。

「不用意に近づくんじゃねえ」

遮ったのは大江。

「あの女、人じゃねえ」

大江の言葉に女は袖で口元を隠し、忍び笑った。

光が手を刀に運ぼうとすると、背をとんと押され、家の中に押し

込まれた。

「大丈夫。取って食やしないよ」

光が背後を振り返ると、坂田が快活に笑っていた。

押したのは坂田のようだった。

「光様、いざという時はこの綱、命に代えても光様をお守りいたします故、どうぞご安心ください」

大江が前を、綱が後ろを固める。

「警戒するなど申しても無理な話かのう。まあ、立ち話もなんじゃ座つてくりゃれ」

光達は警戒したまま座する。

そして、坂田の妻は茶を用意した。

「心配せずとも毒など入ってない」

先んじて坂田がぐびりと茶を飲み干す。

「じゃあ、頂くべ」とアイだけが手を出し、茶を飲む。

他は手すら着けずにいた。

沈黙の中、ずず囃と愛の茶をすすする音が聞こえる。

「はあ、おいしいべ。生き返ったべ」

「そうかそうか。祖茶じゃが、喜んでいただけで何よりじゃ。どれ、もう一杯」

時に、と綱が切り出す。

「我等は坂田殿に用があつてこの足柄山に来たのですが、坂田殿に会つた途端、こちらにも用向きがあると申されまして、一体どのような用件でしょうか？」

坂田夫妻は互に見つめ合い、朗らかに笑う。

「まずはその事について謝らねばならぬな」

何を、という光達の疑問を飲むように坂田の妻は茶をすすする。

「実は人違いじゃ」

「人違い？」

「鬼気がしたものでな。どこぞの鬼を従えた妖怪退治をしておるいけすかない輩と間違えた」

坂田の妻は悪びれた様子も無く、茶をすすり、坂田は「悪い悪い。驚かせたか？」と再度豪快に笑う。

「この頃、あ奴がこの辺りを徘徊していると聞く。何が目的かわからんが、目ざわりじゃからな。蹴散らしてやろうと思つておつたのよ」

「もしやその方とは阿部晴明様ではありませんか？」

光が身を乗り出し、坂田の妻に言い寄る。

「何じゃ？あ奴と知り合いかえ？」

「……命を助けられました。ある晩、四本の角を持つ鬼に家を襲

われ、私以外は全てその鬼に。私も阿部様に助けられなければ、命はありませんでした」

「あ奴が人助けのう。どうにも想像がつかんが、立場が違えば見方も変わるか」

そう言つて、坂田の妻は細い白い指を紅い唇にはわせた。

「玉藻と聞いて、お主らは分かるか？」

「確か帝をかどわかした狐の悪い妖怪だと聞きます」

「申し遅れたが、妾、名を玉藻と申す」

はたと光達は息をのんだ。

「お主らもあ奴と同じように妾を屠ろうとするか？」

見れば先程まで笑顔だった坂田も眉間にしわを寄せ、難しい顔をしている。

「いいえ」

答えたのは光。

その言葉に玉藻は満足そうにうなずいた。

「そうか。では話を続けよう。試したようで悪かったのう。しかし、鬼を下し使令として扱っていない時点で答えは決まっていた様なものではあつたか」

一方、坂田の方はまだ難しい顔をしている。

それに玉藻が気付き、声をかける。

「何じゃ、まだ杞憂か？安心しろ、こ奴らは妾に危害は加えわせんよ」

「そうではない・・・ただ、その、お前の過去の男の話をされると少し気分が悪い」

玉藻は吹き出す。

「妬くな妬くな。ほんに可愛いお子じゃ。愛されとるのう、妾は」
そう言つて、玉藻が坂田の頬を撫でてやる。

すると坂田ははにかむように笑むのである。

こほんと光は咳払いし、「話をしてよろしいか？」と坂田達のノロケを断つ。

「私は親の仇の四本の角を持つと言う鬼をこの手で討ちたいと思っている。ここに来たのもそこにいる坂田殿がもしや鬼ではないかと思つての事」

「ほう、これが鬼かと？どれどれ、では角が無いか探ってみようか？」

玉藻は坂田の頭をわしゃわしゃといじくりまわす。

「それはもう良いのです。実際に会つて坂田殿はおそらく私の仇ではないと分かりましたから」

「そうか。それは残念じゃの。ついでに全身むいて丸裸にしてやろうと思つたのに」

「男の裸なんか見ても嬉しくねえ」

と大江がぼやく。

「そうか？なかなか良い体をしておるぞ。我が夫は。妾などはしよつちゆう見惚れていて、誰かに見せたいほどのなのじゃが。物は試しじゃ。どれ一目でよい。見ていけ」

「勘弁してくれ」

大江は頭を抱えた。

そして、坂田にも「止めておけ」と言われ、玉藻は「そうかあ」とうなだれる。

「話を戻させていただきます。坂田殿、玉藻殿、御二方は四本の鬼について何かご存じではないですか？」

綱は居住まいを正し、真剣な瞳をさらす。

「さて鬼の角は一本、もしくは二本が常。四本の角を持つ者など聞いた事がない」

聞いた事はないが、もしやと玉藻の言葉は続く。

「その四本の鬼、鬼以外の者かもしれぬぞ」

「それはどんな妖怪ですか？」

何か心当たりがあるのかと光は期待する。

「妖怪ではなく、人間の仕業だとしたら？」

あまりのことに呆気にとられる光。

それはあり得る事なのだろうか、綱に視線を送っても、肝心の綱も動揺して目が泳いでしまっている。

大江達に関して言えば、アイまでもが神妙な面持ちで光を見ていた。

「鬼ならばどんな残虐な事も合点がいくが、人間の所業ならば納得はいかんか？」

「それは・・・」

言い淀み、そして答えは淀みの中に埋没した。

「少なくとも妾の中のお奴ならば、その方が合点がいく。ただそちだけを生かした理由だけは分からんが」

「では、四本の角を持つ鬼は存在しないと」

「そうではない。もちろん妾が知らぬと言っただけの事かもしれぬ。

四本の鬼の様な霞を掴むよりも容易く掴めそうな道理があるだけの事」

光の口の中にはざりざりとしたものがあり、吐き出そうにも口にいつまでも残っている。

まるでそのような後味の悪さがあった。

「私は四本の角を持つ鬼を探してみたいと思います」

「そうか・・・見つかるの良いのう」

「はい。ありがとうございます」

そして、光達は坂田達の家を後にした。

「どう思う？」

去っていった光達の残香にすぎり、坂田は玉藻に声をかけた。

「どう、とは？」

「分かっているだろうに。先程の話、きな臭いとは思わんか？」

「確かに。都では何やら不穏な事が起こりつつあるやもしれぬな。物騒な事じゃ」

「そうは言いながらも顔がにやけておるぞ」

おや、と玉藻は恥ずかしげに顔を隠す。

そして、ずっと腰を浮かし、少し用を足しに行くかのように気軽に玄関の戸を引いた。

「行くのか？」

「大丈夫。妾は昔の男に会いに行くのではない。ただの興味本位じゃ」

「そうではない。今の都は危険ではないのか？」

「妾は妖狐ぞ。多少腕も立つ。それはお前も良く知って・・・」

「愛する女が危険な所へと行こうと言うのだ。心配してはおかしいか」

「お前という男は」

「行くなとは言わん。だが、必ず戻って来い」

「あい分かった。そちらも妾が居ぬ間に浮気などせぬようにな」

「それこそ安心しろ。俺の愛は大樹の如き、容易く揺るぎはしない。折れる時はこの命もろともに」

玉藻はその答えに満足したように笑み、家を出た。

「さて、今日は何故にこんなにも客人が多いのか」

坂田は玉藻が出払った玄関を見てやる。

そして、

「入ってくるといい」

と声をかけた。

ガタリと戸が開き、男が一人顔を出す。

それから深々と頭を下げた。

「失礼。卜部うらべと申す」

陰陽交ざりて、闇深まる

「改めて思うと変な奴らだな」

先行する光達の背を見て、大江は呟く。

「ん？何がだべか？」

「さっきの狐んとこで言ってただろ。鬼を下して使役するって話」

「ああ、光の恩人の話だべな」

「何故光達は俺達を下し、使令としないんだろ。これまで隣にいることに違和感を感じなかったが、普通に考えればおかしいんだよな。この状況って奴は。光は鬼が怖くねえのか。いや、そうじゃねえか。俺達を無理やり従わすのは本意じゃない。それとも単にやり方を知らない。なあ、どうだと思っ？」

問われて、隣にいたアイは自信満々に胸を張る。

その答えに大江は少し期待し、

「それはきつと愛だべ」

すぐに落胆した。

「お前の頭の中はそれしかねえのか？」

「そうだべー。オラの頭の中は綱様への愛でいっぱいなんだべえ」
真剣に悩んでいるのが馬鹿らしくなる。

少しその真っ直ぐさがうらやましいとも思うが。

「そうか。お前に少し真面目な話をしようとした俺が悪かったな」
ぐだぐだ考えていても始まらない。

今はただ光の仇討ちの事を優先すればいいかと大江は思う。

成り行きとはいえ大江の父の止めを刺したのは光だ。

光はその事に後ろめたさを感じているのではないのか。

そうも大江は思う。

いや、後ろめたさを感じているのは大江の方だろうか。

仇討ちという暗い目的ではあるが、ただ真っ直ぐに突き進むその姿は何もない大江にはまぶしく映る。

あんなにも小さき背が、と大江が見てやるとその歩みが止まった。何事かと光達の視線の先をたどると、光達に向かい歩を進める人影があった。

「おや、これは珍しい」

その姿がはつきりと視認できる距離でも光は信じられないと目を疑うのだった。

「阿倍清明様！」

「おや、私の名を知っているのか？」

「はい。いつぞやは私が鬼に襲われた際、阿部清明様に助けられました」

「ふむ」

阿部は光達一行をなめまわすように眺め、

「では、その鬼らが源の家を襲ったお主の親の仇と言う訳か？」

「いえ、そうではありませんこの者達は私の仇討ちを手助けしてくれている者達で。まだ父の仇の鬼は……」

「危険だな」

「はい？」

「危険だと申しておる。そのように鬼を共に連れては夜もおちおち眠れんであろう。どうだ、私がその者達を預かり受けよう」

まるで大江を物のように扱う阿部に光は呆気にとられたが、仮にも命の恩人。

どうしたものと逡巡していると大江が前に出た。

「てめえ。さつきから聞いてたら勝手な事ばかりぬかしやがって。

誰が光の親の仇だ？てめえは俺を何だと思ってるんだ？」

「鬼だろう。忌む者、禍事の象徴。そして、下す者」

「……この。一発殴ってやる」

「止めないか。大江。従者なら従者らしく共に光様の言葉を守つものだ。しゃしゃり出るな」

「誰が従者だ！お前と一緒にするな」

綱なりに大江を諫めたつもりだったが、火に油を注いだようだ。

「アイ！」

「分かつてるべ。あいつの玉をつぶしてやるべ」

「アイさん！」

「おう。そうだったべ。玉は下品だったんだべ」

ピコピコとアホ毛を揺らし、アイは玉をどういふ風に言ったらいいかと悩む。

「アイさんも大江も落ち着け、何をそんなに怒っているのだ？阿部様に失礼であろう」

「そんなもの知るか。あいつが光の恩人だろうと、いけすかないものはいけすかねえんだ。だって、あいつからは・・・」

光はそんな大江達のやり取りを見て、くすりと笑う。

「申し訳ないのですが、大江達を阿部清明様にお譲りできません。あの者達はやはり私の仲間なのです」

ふむ、と阿部は腕を組む。

「ならば仕方あるまい。力づくで奪うとしますか」

人型の紙の依り代を地面に放ると、そこから二体の鬼が現れた。

光達は現れた鬼達に驚き、ついで放たれる臭気に袖で口元を押さええた。

「鬼の死臭がしやがる」

大江が言葉をつなげた。

各地を転戦してきたのだろう。

その鬼達には多くの傷がある。

しかし、その傷は放置され、化膿し、虫が沸いてしまっている始末であった。

かつての大江の父のように理性を失い、ざんばらんの髪を振り乱し、よだれをたらし、牙をむき、爪を立て、闘争本能を光達に当てつけていた。

ぼろきれをまとい、首に付けた金環^{きんかん}だけが、浮いて見える。

「お待ちください。何故このような・・・」

「必要だからだよ。もうこいつらもガタが来ていてね。そろそろ替

え時なのだよ。他の手持ちの鬼は弱すぎてどうにも頼りない。それに比べて、その鬼達は活きが良くて、なかなかに見どころがある」「光。もうこんな奴と話をしても無駄だ。俺は我慢ならねえ」「しかし・・・」

「止める。大江。控えろ、光様の立場を考えろ」

「綱。お前はあいつらを見て何も思わねえのか？」

「見るも無残とはこのことである。」

そして、その哀れな鬼達を平然と操る男も常軌を逸しているとは思えない。

「僕にはあちらの鬼の姿の方が普通だった。だから、あまり驚きはない」

「てめえ！てめえもあいつと同じか？お前も俺にあんな姿になれっ
て言うのか？」

「違う！そうではない。普通だったと言って・・・」

綱に掴みかかる大江であったが、すぐに横やりが入る。

「これ以上の戯れは無用。頂こうその鬼達を」

阿部が使令の鬼達を動かした。

反応したのはアイだった。

一陣の風となって駆けてきたアイを使令の鬼の腕が迎え撃つ。

穿つ地面。

アイの姿はそのまた奥、相手の懐に。

地面に突き刺さった腕を抛り所に体を飛び上げ、顔面を蹴り上げようとした。

が、アイの足は方向を変え、肩口を蹴り上げ、宙で弧を描きその場から離脱する。

「ぐおおおおおお」

使令の鬼達がうめきを上げた。

顔を押しさえ、その指の隙間からは矢が生えている。

双眸にえぐる矢。

「何だべ？」

アイ、そして光達は矢の飛んできた方向を見上げる。

そこには一人の男が弓を構えていた。

「そこにおわすは阿部清明様とお見受けする。某、それがしうすいのさだみつ碓井貞光と申す者。ご助力いたす」

「私の使令を射ておいて、助力とは片腹痛い」

阿部の頬を矢がかすめる。

「すみませぬ。某、弓の腕に少々難がありまして。お許しを」

阿部は碓井を睨みつけるが、碓井は気にした様子も無く矢をつがえる。

「大丈夫。今度は外しは致しませぬ」

「ふん。いらぬ邪魔を。興が削がれたわ」

と阿部は背を向けた。

碓井はそこを容赦なく射る。

だが、使令の鬼が身を呈して守りに入った。

鬼の体には矢は通じない。

ちっ、と思わず碓井から舌打ちが漏れた。

大江が逃がさずとばかりに金棒を振り下ろすが、土煙を上げるだけ。

そして、土煙が晴れた後、そこには阿部達の姿はなかった。

呆然と光達は阿部のいたところを見つめていた。

ひよいひよいと碓井が崖を飛びおり、光達の下に寄ってくる。

「貴方様は？」

「先程名乗ったはずだが・・・碓井貞光と申す」

「何故碓井殿は阿部様に弓引くのです。あの方は宮仕え、朝廷の拝命受けて各地の妖怪変化を治めていらっしやる方です。いわば、朝廷に弓引くも同じ事」

「世の中知らぬ方が良い事もある」

割って入っておいてその言いくさはないだろうと、少しムツとする。

しかし、相手に敵意が無いとみて光は安綱には手をかけなかった。

「それとこれを言いに来たのだが、このまま鬼を連れて歩くつもりなら、すぐにでも都から遠く離れるのだな」

「それはどういう意味なのです？」

「先程知らぬ方が良いと言ったばかりではないか」

そして、何も語らぬとばかり光達に背を向けた。

「私は都から遠く離れるつもりなどありません。私には親の仇を討つと言う使命がある。親の仇が千里先にいようと言うなら走りましよう。しかし、都にいるとうのならここを離れる訳には行きません。そして、仇を討つため大江達の力は必要です。だから、大江達とも離れません」

「貴公の親の仇は都の近くにいるのか？」

「分かりませぬ」

「では、これを機に遠方も探ってみるのも・・・」

「嫌です」

何が何でも我を通そうとする光に対し、碓井の心根は折れそうであつた。

遠方の鬼の話でもすれば、そちらに向かうであろうか。

しかし、今更。

疑ってかかるだろう。

「語らねばならんか？」

「ぜひとも」

碓井は嘆息を吐く。

「近く凶事がある」

「それは一体？」

「先程の阿部清明が謀反を起こそうとしていると我等は見ている」

「まさか？！阿部清明様が」

光は綱の顔をお互い信じられないと見合つた。

大江はさもありませんと納得の様子。

アイは特に興味がないようだ。

「しかし、謀反といえども既に阿部清明は朝廷の中で確固たる地位

を持ち、与^{くみ}する者も多い。事は穏やかに進み、いつの間にか朝廷は奴に乗^つ取られていいるであろうよ」

「そこまでおっしゃるのなら阿部清明様に関する確かな証拠が御有りなのですよか？あるのならば、ちゃんとした手順を踏んで断罪すればよいではありませんか？」

綱としても性格に難ある御仁だとしても謀反は考えにくい。

差し出がましいようだが、一言添えた。

「表立って動けぬ理由は先程貴公が言ったではないか」

と碓井は光を見た。

朝廷に弓引くと見られてもおかしくないと言う事か。

「とは言え、我等とて手をこまねいて何もしていない訳ではない。

阿部が妖怪退治にかこつけて、下し、自分の戦力を増強するのを妨害し、あわよくば先程のようにどさくさにまぎれて屠^{ほふ}ってしまおうとしている」

やっている事は山賊とたいして変りないし、どさくさにまぎれてとは、どうにも碓井の方が悪人に見えてくる。

「奴がここに来たのも妖弧を我がものにしようとの腹。もちろんそちらも手を打ってはいるが、ここきて鬼二匹も増やされては正直我等としても痛いのだ」

碓井はそう言って大江とアイを見てやる。

大江にしてもアイにしてもそう容易く阿部の下に下る気はない。

その気概がにじみ出ているのか、計らずとも碓井にも伝わった。

「兎角^{とかく}、気をつける事だ。事が凶に傾けば、貴公達と敵として相見える事もあるやもしれん。出来れば避けたいものではある。では、これにて某は退散するでしょう」

気をつけられよと、もう一度言葉を繰り、碓井は立ち去っていった。

光にとって、阿部は命の恩人である。

妖怪退治をしているものが、鬼を見て、退治しようと言うのも道理ではあるが、問答無用と言うのは光には納得いかなかった。

それに先程の碓井の言葉。

全てを鵜呑みにする気は毛頭ないが、それでも猜疑心さいぎしんを抱かせるには充分であった。

親の仇の四本の角を持つ鬼を討つ。

それで事は成就するはずであった。

しかし、四本の角を持つ鬼そのものが阿部の言葉に端を発しているのだ。

故に親の仇討ち自体揺らぎつつあった。

玉藻の『人間の所業ならば納得はいかんか?』という言葉がそそのかすように光の耳の奥をくすぐる。

ようよう闇は深まりつつあった。

別れ

闇は深く、月と星以外の光が無い故、ものの姿を捉えるのは容易ではない。

それこそフクロウのような目でも持つていなければ。

しかし、そのような目を用いなくても光達の場所は簡単に知れた。「どういう事だ！綱！」

「だから、先程も言った通り僕は幼少の頃からあのような鬼の姿を見ていたから。僕にとってはあつちの方が鬼らしいんだ。別に僕にとっては普通の光景だ」

近くにまだ阿部が潜んでいるかもしれないと、わざわざ火をおこさないでいるのに大江の大声で全くの無駄である。

「あれを見て、普通だつて？お前、頭おかしいんじゃないのか？」
神経質に叫びながら、大江は綱の襟元を掴みあげる。

どうにも大江には阿部の使令の鬼の姿が刺激的すぎたようだ。

「止めないか、大江」

「何だ、光までこいつの味方をするのか？」

「そう言う事ではない。いい加減にしないか」

体軀は明らかに大江の方が大きい、しかし、光の目には逆らわせない力強さがあつた。

舌打ち一つ、大江は綱の服から手を引き、光達に背を向けた。

「何処へ行く？」

「何処だつていいだろ」

「碓井殿には大江やアイとは離れないと言つた」

「知るか、そんなもの。それはそつちの都合だろうが。俺は俺の好きないようにやる」

「私の親の仇討ちを助けてくれるのではなかつたのか？」

「はん。今は綱がいるだろ。俺がいなくても別に大丈夫だろうよ。

それとも何か？やっぱり俺がいないと駄目なのか？」

「無論光様は僕が守る」

無様な意地の張り合いだと、光からはため息しか出てこない。

大江にしてみれば光達との関係を綱に否定されたような気になった訳であるし、綱にしてみれば光にとって役に立つのかと、否定されている様な気になったのだろう。

「じゃあな、世話になった」

「大江」

去りゆく背中に何と声をかければいいのか分からなかった。

ただ名を呼んだ。

「何だ？俺がいなくなったらさみしいとか言うんじゃないだろうな」

「さみしいと言えば、お前は残ってくれるのか？」

「止めておけ。光の柄じゃねえよ。元より俺達は鬼と人間。住む世界が違った。それだけだ」

光にも大江の気持ちが少しは分かる。

おそらく隔たりを感じたのだろう。

そして、大江にとって鬼であるという変え難い事実が、光達の足かせになると感じたのであろう。

「アイ。すまないが、大江を頼む」

小さくなつていく背中に出来る事は限られていた。

アイは用件を頼まれて、綱を見るが、綱はそっぽを向いたままである。

綱としては先程まで言い争っていた相手を頼むとは言い難い。

もちろん大江の事を心配しないでもないのだ。

トカゲのしっぽ切りをしたみたいでいい気分も出ないのも事実。

アイはそんな綱の心情を察知し、頷いた。

「光も綱様の事頼むべ。オラがいないうちに悪い虫がつかないようになちやんと見ていて欲しいべ」

「頼まれた」

「それに光が綱様に手を出したりしても駄目だべ。その時は光といえどもただじゃすまないべ。もちろん一時の気の迷いつてのものなし

だべ」

「大丈夫だ。アイ。天地神明に誓ってそれは、ない！」

断言する光に綱はそんなあと情けない声を出す。

「綱も年頃、美人を見かけて声をかけるなどは酷かもしれぬが、私の保身のためだ。我慢しろ」

そういうことではと、綱は口の中で呟く。

「じゃあ、行くべ」

「ああ、気をつけてな。出来たら大江を・・・」

連れ戻してと言いかけて、はたしてそれが大江にとって幸かと言
い惑った。

「どうするだべか？」

「・・・一発殴つといてくれ」

「分かったべ」

そして、アイは大江を追い、その姿を消した。

道連れが二人減っただけである。

なのに、この空漠感くうぼくかんは何であろう。

「私は親の仇の四本の角を持つ鬼を討つ」

光は自分の目的を口にして、ギョツと安綱を握り締めた。
あの日の悲しくも晴れやかな夕日がひどく懐かしかった。

酒宴

大江と光達が別れて数日が経った。

今だ光達は仇の鬼を求め、当て所ない旅を続けていた。

一方大江達はと言うと、

「はははは、何甘酒一杯でへばってんだよ。アイ」

先程目を回し、大の字に転がったアイを見て、大江は高らかに笑った。

「外は寒いですから、体が温まる物と思ったのですが。アイ様にはもつと別の物を用意したほうが良かったですね」

そう言つて台所から女が現れた。

女の頭には角がある。

「いやいや気にすることねえよ。それにしても悪いな。寝る所を用意してくれるだけじゃなく、こんなにも馳走になつちまつて」

女はアイに布を一枚かけてやり、首を横に振った。

「いえ、山賊から助けていただいたお礼です。もちろんそれだけではないのですけれど・・・」

と女は目を伏せた。

「本当は今日出稼ぎに行つてゐる夫が帰つてくるはずだったのですが、それが急に帰れないと。久方ぶりに会う夫に腕を振るおうと思つたのですけれど」

「それは、何というか、すまねえな」

と大江は盃を置いた。

「謝らないでくださいな。どうせ私一人では食べきれないのでですから。こうやって喜んで誰かが食べてくれた方が作つた方としても嬉しいです」

女は大江の盃に酒を注ぐ。

「それにお酒は一人で飲むより、こうやって誰かと飲む方がおいしいでしょ？」

「お、おう。そうだな」

女は艶やかな笑みを浮かべた。

どうにもよからぬ考えが首をもたげるので、それを飲み込むように大江は酒をあおった。

鬼とはいえ、こんな美人を一人置いて行くのは旦那もさぞかし心配だろうと、何とか大江は旦那の同情に心を移せた。

「つかぬ事を聞くが、旦那さんも鬼か？」

「ええ、そうですが。それが何か？」

そうであるわなと、大江は言葉を咀嚼する。

それが普通で、鬼と人など。

「今、幸せか？旦那さんとこんな風に離れ離れで」

「大江様、それはもしや口説いておいでなのですか？」

悪戯っぽく笑む女に大江は真剣な眼差しで答える。

「そんなんじゃないやねえ。ただ幸せなのかと聞いている」

女は大江から視線を外し、表情を曇らせた。

まるで様々な感情を編み込んでいるようだった。

「そうですねえ・・・幸せだったのでしょうかね」

女は辛そうな顔を一瞬見せ、ついではあつと明るい笑顔を張り付けた。

「私の事などどうでもいいじゃありませんか。どうぞ今夜は楽しく飲みましょう」

女は空になつた盃になみなみと酒を注いだ。

「すまんな」

そう言つて、大江は盃をすつと空けた。

虚空を見つめ、思い浮かぶは光の事。

何処かでのたれ死んでやしないか。

いらぬことに首を突っ込んではいないかと。

心配事が大江の頭をよぎる。

(親兄弟でもないのに、何でこんなに心配しているんだか)と自嘲を漏らし、大江は酒を口に運ぶ。

(そうだよ。あちらには綱がいる。人は人同士仲良くやっているだろう。こちらも鬼同士仲良く・・・アイじゃ、なあ)

大江が見てやると、アイはいびきを立て、よだれまで垂らして寝ている。

(かといって人様の女に手を出すのはまずいし。まあ、気楽な一人旅って言うのも悪くはないか。アイには悪いが、寝ている隙に先に落ちまうか)

大江はそう思い、酒を注いでくれている女を見た。
見ると、女の手が震えている。

「どうした？具合でも悪いのか？」

トントンと戸を叩く音がした。

大江に嫌な予感が走る。

(旦那が帰ってきたのか？いらぬ勘繰りされなきゃいいけど。修羅場はごめんだぜ)

女は戸を開けようと腰を上げようとするが、それよりも先に戸が開いた。

「お前は!？」

「なかなか楽しそうな酒宴だ」

現れたのは阿部。

事を構えようと大江は立ち上がろうとするが、うまくいかない。

酔いのせいかとも思ったが、違うようだ。

手足がしびれる。

「何か酒に盛ったのか」

低い語気で女を責めると、女は大江から視線を外した。

「すみません。夫が人質に取られて・・・」

切り返して、視線は阿部を斬りつける。

だが、あいにく殺気だけで人を殺める事は出来ない。

「何をそんな恨みがましい顔をしているのだ。これまで散々外道を歩んできたのだろう。これも因果応報と言うものだよ」

「てめえは鬼を何だと思ってやがるんだ。鬼はてめえみたいな卑怯

な真似はしねえ」

「卑怯とは心外だな。こういうのは知恵を使ったと言っただよ。愚か者」

阿部は這いずる大江を見下し、金環を大江の首に付けた。

「うおおおおお!!」

咆哮はまどろみの中に、意識は鬼の血の定めの中に。

「ひか……る……」

途切れる視界の中、空を掴む大江の手は届かない。

蜘蛛の糸

「光様、今夜はここを宿としましょう」

綱が指し示したのは打ち捨てられた寺。

ボロとは言え、雨風はしのげる。

野宿をするよりかはいくらかましである。

「ひどい有様だな」

どれくらいの間放置されていたのだろう。

寺の中はいたるところにクモが巣を作っていて、まるで繭の中にも迷い込んだようであった。

「光様、少々お待ちを」

「分かった」

綱は手際よく寢床を作るため、蜘蛛の巣を払いにかかった。

光は綱の用意が終るまで、ぼんやりと外を眺めることにした。

宵闇はもうすぐそこまで来ている。

けれど、日は沈みきってはいないので、空の星はどうにも薄れた

光しか放ってはいない。

(まるであの星を掴むかのようだ)

はつきりと見えてさえも掴めぬ星。

それを今は何かが邪魔をして、ぼんやりとしてしまっている。

ただでさえあての無い旅である。

四本の角を持つ鬼、それだけが光の持つ情報の全てだった。

人を害する鬼ならば、他でもうわさになっていようと云う、安易な考えがあったのも確かではある。

しかし、今となってはその情報も不確かとなってしまった。

実際には四本の角を持つ鬼なんていやしいのではないかとさえ思えてくる。

「光様、用意が整いました」

光が振り返ると、つい立てとその奥に用意された簡易の寢床。

決して寝心地がいいとは言えないが、何も無い綱に比べれば大分寝やすい。

「では、僕は番をしていますので、どうぞ光様はお休みください」
そう言っつて綱は一礼して、つい立を背にして、座した。

おそらくは寝ずの番をするつもりなのであるう。

しかし、大江と一緒にいた頃とは違い、交代に眠ることなど出来ない。

結局うつらうつらと眠ってしまうのが常となっていた。

おそらく今夜も夜半に起き出し、眠ってしまった綱に代わり、番をしなければいけないだろう。

そう思っつて、光は綱の言葉に甘え、早々に眠りにつくことにした。
上着を一枚脱ぎ、掛け布団のようにする。

髪を解き、櫛をかけた。

香油など無いので多少臭いが気になったが、旅の身の上、仕方がないなと光は自分を納得させた。

そう言えば、大江と二人旅をしていた時は「鬼だから寝ずとも平気だろう」といい加減に押しつけ、朝起きて寝入ったしまった大江をよく蹴飛ばして起こしたものだ。と光は思い出す。

間抜けな顔が浮かんで、光はくすりと笑んだが、すぐに消えた。

最早ここにはその姿はないのだ。

(もう大江との事は過去の事。今はただ仇討ちの事を・・・)

過去の事、復讐と言っつ過去の縛られた光には最も相応しくない言葉であった。

想いは悩み、巡るが、それでも体は疲れを訴え、休ませるとまぶたを重くする。

そして、光はまどろみの中に落ちた。

人の気配がして、光は目が覚めた。

すぐに傍に置いてあつた安綱に手をかけ、抜こうとする。

「光。光」

名を呼ばれ、手が止まる。

そして、名を呼ぶ者の姿を認め、その手は抜刀の意志を失った。

「父上？」

光の目の前の人物は穏やかに笑った。

にわかに信じられず、夢かと思うが、つい立ての向こうに綱の気配はある。

最早寝入ってしまったっているようだが。

「旅は、辛くはないかい？」

目の前の父親の姿をした者が光の右手に両の手を添える。

その手は温かく、力強い。

父は死んだ。

そんな事は頭では分かってはいたが、実際に昔と変わらぬ姿と声で慰めれば、心揺るがない光では無かった。

旅が辛い訳がない。

辛い、もうやめてしまいたい。

そう口に出来たのならばどんなに楽になるだろうか。

けれど、その先に後悔しか待っていない事も光はよく知っていた。

「もうやめても良いのですよ」

光ははたと顔を上げる。

目の前にいた父親はいつの間にか、母親の姿に変化していた。

「母上？」

何もかも包み込んでくれる様な慈しみ溢れる声に光は涙する。

「光はもう十分に頑張ったではありませんか？」

母親の姿をした者は光を抱き寄せ、囁く。

「今は安らかにお眠りなさい」

あやすように髪を撫でられる手が心地よく、光は目を閉じようとしていた。

「光様あ！」

叫び声と共につい立が倒れ、綱が母親の姿をした者に斬りかかる。刃は空を斬り、飛びのいた母親の姿をした者に綱は一瞥すると光

に詰め寄る。

「光様。大丈夫ですか？」

いつの間にか光の体は蜘蛛の糸でぐるぐる巻きにされていた。その糸を綱は力任せに剥いでいく。

「ああ、大丈夫だ」

ぼんやりとした答え。

その眼の先では、母親の姿をした者が、袖を口元に添え、目尻を下げた。

「わが背子が来べき宵なりささがにの」

声に綱は立ち上がり、応える。

「雲を払いて光求めん」

綱の愛刀、膝丸を刃を上向きに、中段に構える。

左手を左太ももに添え、少し腰を落とした。

足は右を正中に、左を開いて、ただ添えた。

「せつかくの逢瀬の歌も台無し」

「あいにく僕は夜闇よりも気持ちの良い日の中の方が好きなので」
母親の姿をした者は嘲り笑い、そして今度は光の姿に変化した。

一糸纏わぬその姿に。

「坊やが」

妖艶な笑みを浮かべ、綱を挑発する。

しかし、綱はそれに怖じる事無い。

詰め寄る。

膝丸を以て、上段に肩口を斬りつけた。

「ぐががあああ!!!」

「光様を愚弄するな」

昇りきった膝丸を引きもどすよう左手を柄へ。

二の太刀は上段から振り下ろされる。

空振り。

再び飛びのいたその姿は、今度は蜘蛛の化け物に変化していた。綱はじっと相手を見据え、膝丸を体の奥へと押し込みバネを作り、

突きの構えへ。

左の足が正中を取った。

「止める、綱」

一步踏み出して、光が呼び止めた。

どうしてと問うに振りかえるその目の端で、蜘蛛の化け物が逃げ出そうとしているのが見えた。

動きを止めた歩みを進めようとした時、

「追うな」

もう一度制止の声が響いた。

綱の目の前で蜘蛛の化け物が逃げ出し、その姿を消した。

そして、綱は膝丸を鞘に収めた。

「よろしいのですか、光様？」

「構わない。元々あちらの領分を侵したのはこちらだ。このままこちらの我を通せば、私達も阿部清明様と変わらない」

「ですが、此度はあちらから襲ってきたのです。それを返り討ちにしても……」

「我が家に四本の鬼が侵入した時もこれを排しようとしただろう」

それとも相手のするがままを見過ごせば、殺されずに済んだものとお前は思うのか？」

「相手は化け物です。僕達人の道理に合いません」

「綱、私達人も化け物なのだよ。姿形、それが違うだけで簡単に命を奪おうとする。これを化け物と呼ばずになんとする」

「光様……」

納得したとは言い難かったが、綱はもはや何も言うまいと光に従った。

そして、旅立ちの準備を始めた。

光は乱れた髪を整え、髪を束ねる。

綱は寢床を片す。

「それとも綱はもう一度私の裸を見たくて、あの者を追いたかったのか？」

「そ、そんな事はありません！」

頬を赤らめ、そそくさと準備をする綱をからかうと光は微笑んだ。その心は少し軽くなっていた。

例え幻とは言え、父と母に会えた。

その事に素直に感謝していた。

「聞こえているか分からないが・・・邪魔をした！みだりに領分を侵した事、許して欲しい！願わくば、貴公に安寧が訪れん事を！」

そして、光達は古寺を後にする。

「綱、都に行こう」

まだ明けぬ暗い道で光は綱に向かって言う。

「そして、阿部清明様に問うてみよう。四本の鬼の事を」

「あの御仁がそう簡単にお話ししていただけたとは思いませんが」

「私もそうは思うが、やはりそれでも避けては通れぬ道であろう」

もしあの惨事が鬼の所業では無く、人の所業なら、むざむざ死地に赴くようなものである。

それでも、

「私は知りたいのだ。真実を」

凶事

目の端に敵が映ったのは良かったが、その数が思ったよりも多かったのは誤算だった。

「わらわらと何処からわいてくるのか」

愚痴りながらも碓井は矢をつがえる。

通りを二つ挟んで味方の軍が戦っている。

敵としてはそこを挟撃しようと言う腹なのだろう。

何とかして向こうが片がつくまで時間を稼げたらいいのだが、いかんせん一人だけではどうしようもない。

独断先行のつけと言えばそれまで、自業自得である。

何か手は、と思索しているうちに矢が尽きた。

「さあ、観念するがいい。逆賊よ」

「逆賊とはひどい言われようだな」

もはや正確無比の矢が飛んでこないと知って、尻ごみしていた者も足して、敵がまた増えたように思える。

勝利を確信したような表情は非常にしゃくである。

こんなことなら隠し矢の一本でもおいておくんだつたと、碓井は思う。

背の矢筒を外し、弓を捨て、刀を抜いた。

「刃を交える前にそなたらに一言言っておくことがある。某、手癖が悪い故、弓の腕に難がある。しかし、それにもまして刀の腕にも難がある」

もはや言葉など不要と場違いが碓井に斬りかかる。

心の臓を一突き。

「間違つて、殺めるやもしれぬ。気をつけられよ」

事切れた死体を蹴り飛ばし、刀を抜く。

血糊を振り飛ばし、碓井はおののく敵を見た。

数は圧倒的、もはや碓井の前には死しか待つてはいない。

それでも無然と立ちはだかる碓井に対し、戦慄が走るのであった。ザリツ。

碓井が一步踏み出すと波のようにたじろぐ砂音がする。

そして、恐怖心は堰を切り、一人が上段に構え碓井に斬りかかる横になく。

続けざまに来る者を体をそらし、袈裟切り。

ついで襲いかかる刃を受け、はじき、体を反して背後から斬りおろした。

背を向けたを好機とばかりに勇んだものの、碓井が振りかえり睨みをきかすと二の足を踏んだ。

ザリツ。

また一步碓井が踏み込む。

それを合図に覚悟と言葉を残し斬りかかるが、一閃、碓井に斬り倒される。

そして、また血糊を吹き飛ばす。

四人である。

四人が一瞬のうちにやられてしまった。

数の上ではたかだか知れている。

依然碓井の不利はゆるぎない。

それでも碓井の持つ力を知るには十分であった。

自然、碓井を中心に円陣が組まれた。

碓井と敵との間は碓井の刃が届く範囲よりも少し広く、それはすなわち碓井の殺気が足をまわりつく範囲ともいえた。

その得物を封じれば、その動きを一時封じれば、他の者が相手をしている隙ならば、そんな浅慮の輩が次々に血の花を散らす。

碓井はまとも組み合っではくれない。

刃は受けると言うよりも流す。

そして、不用意に間合いに入ろうものなら指や首筋、目を碓井の刃がかすめた。

致命傷にならずとも格下の相手の戦意をくじくには十分であっ

た。

こうして何とかこう着状態を作り出した碓井であったが、それを打開できるまでの力は持ち得てなかった。

(このまま時間を稼いで味方が来るのを待てば……)
だが、省みてすぐに考えを変える。

(いや、もし片がついたのならこちらに来ずに一気に阿部との決着をつけに行くか。少なくとも私ならそうする)

碓井は敵を見渡し、指揮する者を探すが見当たらない。
もう既に矢で射てしまったのだらうか。

それともどこかに隠れているのだらうか。
敵の動きを見れば、おそらくは前者。

統率無き烏合の衆、そう聞くと容易く瓦解しそうなものだが、
(いささか難儀であるな)

命令なくとも戦う意思がある。
大局を見ず、今日の前にいる碓井しか目に入っていないだらう。

(どうしたものか?)
「碓井様!!」

碓井が思案に暮れていると円陣に斬り込む影があった。
「ト部、お前がどうしてここに?」

気がそれたを機とした者をいなし、碓井は斬り捨てる。
ト部の視線の先には二人の人物がいた。

「ご助力します」
そう言つて綱がト部に続いた。

(あれはいつぞやの……)
後方には光が安綱を抜き、構えていた。

援軍と言つには余りにも少ないが、戦況を覆すには十分な力を思つていた。

(相も変わらずト部は危険な戦い方をする)
つば迫りの間合いでだらりと腕を下げ、斬り合っている。

その体さばきは見事で、捉え所がない。

その昔、碓井も卜部とやり合ったなら懐に入られたら負けるのではないかと考えたこともあったが、

「その前に斬つて捨てればよい事」

碓井は混乱により不遇にも間合いに入ってきた者を斬り捨てた。

卜部、碓井の両者の強さには目を見張るものがあった。

自然、弱い方へ、光へと刃が向く。

そこに綱が割って入り、三人を一度に横なぎにして斬り捨てる。

（ほう。二匹の鬼を侍らせていたと思つたが、修羅をも飼つていようとは）

「光様に少しでも触れる事。この綱が許しはしない！」

（いや、忠の鬼とでもいうべきか）

数の上ではまだまだ不利であったが、碓井は敵を見据えて言う。

「どうした逃げぬのか？逃げぬのなら追わんぞ」

そして、碓井の脅しに屈し逃げ出した一人を端に敵は引いて行った。

すっかりと敵の気配が消えて、ようやく碓井は息を吐いた。

油脂を拭いて、刀を鞘におさめた。

「卜部、何故お前がここにいる。お前は都に人が入らぬように留め置く役目だつたらう」

「それが・・・」

とすまなさそうに卜部は光達に目をやる。

「碓井殿、阿部清明様は今どこに？」

「なるほど。せき止められずにここまで流されてきたか」

「申し訳ありません」

碓井は卜部を別段とがめる様子も無く、光達と向き合う。

「ここに来たと言う事は鬼を取り戻しに来たと言う訳だな」

「どついつい事です？」

「ふむ？知らずに来たのか。貴公達の連れだつた鬼達は既に阿部の手に落ちた」

「まさか?!」

「それだけではない。足柄山の妖狐も既に奴の手の中だ。ちょうど今頃我等の軍と対峙しているところである。」

光達は驚きを隠せず、綱はすぐさま光に提案する。

「光様、今すぐ玉藻殿を助けにまいりましょう。」

「いや、そちらは坂田殿が何とかするであろう。それよりも今はこの隙に阿部を叩く方が上策だと考えるが」

「しかし！」

光はうつむき、目を閉じ、決断する。

「阿部清明様の所へ行こう。」

「・・・分かりました、光様。」

「では、我々もそれに従おう。鬼ほどではないが腕の立つ者もいる。特にこの卜部などは役に立つ。些末な用事があればこの者に遠慮なく言うがいい。ああ、それと某は全く役に立たないのであてにしないでもらいたい。」

「碓井様・・・。」

呆れた様な声を出す卜部。

光はくすりと笑った。

「では、参りましょう。阿部清明の元へ。」

光はそう言つて前へ歩を進める。

光の声の後に続く三人は静かにうなずいた。

断

阿部のいる朝廷の宮に光達は足を踏み入れた。

光を中心に前方を卜部、碓井が固め、道を切り開く。

そして、後方を綱が詰め、光を守りながら進んだ。

敵の抵抗は比較的少なく、一気に敵の懐に入れると思ったが、

「光様あれを！」

後方から追ってくるのは鬼が一匹。

光と綱は足を止め、轉身する。

「碓井殿、卜部殿。ここは我らが」

「相分かつ……」

振りむき返事する卜部の目の前で上から壁が落ちてきて、ドスンともものすごい音をたてた。

「分断とは阿部も狡い真似をする」

「気にするな、卜部。どの道あの二人にここを任せて先を急ぐつもりだったのだ。それよりも前を見る、卜部」

そう言われて卜部が目をやると、前方では鬼が次々と姿を現していた。

「厄介だな。卜部、あれらを全部任せても良いか？」

「御冗談を。碓井様もちゃんと戦ってください」

「何、卜部はやればできる偉い子だ。私は信じている。頑張れ」

「碓井様……」

白い目で見る卜部に碓井は仕方ないと息をつく。

「碓井貞光。この鬼切りの刀、安綱の影打ちが一刀。獅子ノ子にてお相手致す」

「卜部季武。安綱の兄弟刀の膝丸の影打ちが一刀。吠丸にてお相手致す」

言葉を聞かない鬼達に対して名乗りを上げても詮無い事のように思えるが、両者の意気は上がっていた。

「いざ参る！」

「光様。いかがいたしましたしょう？」

綱は鬼を倒し、断たれた進路を見て光に問う。

「他の道を探そう」

「そうですね。碓井様も卜部様も無事でいると良いのですが」

「あの二人は腕が立つ。心配することもあるまい。それよりも自分の身の安全を心配しろ。綱はそれほど強くはないのだから」

「はい。ありがとうございます」

ここに来るまで光が安綱を振るつたのは数えるほどしかない。

ほとんど他人任せでその言いくさはないだろうと普通は思うが、綱にしてみれば心配してくれたと、喜ぶ言葉であった。

もし綱に尻尾があれば、左右に激しく振っている事であろう。

「騒がしいと様子を見に来れば、お前達はいつぞやの。鬼を取り戻しに来たのか」

不意に声がして、光達は身構える。

「阿部清明？！何故ここに？」

「何故とは妙な言い草だな。お前達は私に会いにここまで来たのだろう。出向いてやったのだ。喜べ」

薄い笑いを浮かべる阿部の傍らには二人の鬼。

アイと大江の姿があった。

「アイ！大江！」

光は名を叫んでみるが、二人の瞳に正気はなく応えない。

「阿部清明様、一つお聞きしたい。何故このような事をなさるのですか？鬼を無理やりに従わせ、多くの人の血を流し、貴方は何がしたいのです？」

「何故、何故、何故、何故、問うてばかりだな。そのように自ら思考せず安易に答えを求める者がいるからこの世は墮落していくのだ」「墮落？この都の惨状を引き起こしたのは阿部清明様でしょうか？己が手で落しておいて、さもありませんとはいかがなものでしょう」

「紙に墨が落ちれば、滲んでとれぬ。新たに紙を用意するしかない」
「戯言です。この世は綴られる物語ではない。何処にも真つ白な紙などありはしない」

「何故ないと言い切れる。ないなら作ればよいではないか」

「そんなもの・・・」

「出来る訳ないと？そうやって思考を止め、ありふれた答えを手にして仕方ないと諦めるのか？それは墮落ではないと？」

綱は二人の問答を静観していた。

いつでも動きだせるよう構えはとかない。

綱には分かっていたのだ。

いくらこの二人が言葉を交わそうと分かり合える事はないのだと。何故ならその理由が目の前にあるからだ。

その理由、アイと大江は、低いうなり声を上げていた。

まるで獣のようではないかと、綱にもやり切れぬ思いがよぎる。

「とは言うものの。貴公には感謝もしているのだよ」

一変して、阿部の表情は柔和なものに変わる。

「貴公の連れていた鬼。思ったよりも上物だな。事が思ったよりもうまくいった。惜しむらくは隻腕であることぐらいだが、それを差し引いてもその価値はあまりある」

阿部は満足そうに大江の腕をべたべたと触れる。

その様子を見ながらじつと耐えていた光であったが、ついには光の中で何かがはじけてしまった。

「その・・・その汚い手で触れるな！」

激昂する光が一步踏み出したと同時にアイの姿が消えた。

次の瞬間、光の目の前で正拳突きを放とうとしていた。

割って入るは、綱。

拳を膝丸の腹で受け、力任せにアイを吹き飛ばした。

着地点を狙おうとした綱であったが、吹き飛ばされながらも放ったアイの蹴りが綱の眼前を横切り、その勢いを殺され、うまくいかず避けられる。

「止めるんだ！綱！アイは正気じゃない！」

「分かっております。ならばこそ、光様。その命は承服しかねます」
「アイも！自分が今、誰と戦っているのか分かっていいるのか！」

声は届かぬのだろうと分かっていながらも、光は叫ばずにはいられなかった。

想いは届かず、アイは微塵の躊躇なく綱を攻撃する。

その動きは綱には追い切れず、先の動きを読んで行動するしかなかった。

まだ大江が阿部の傍らにいる。

大江とアイの二人がかりで来られる前に、何としてもアイを始末したい綱であったが、アイの実力はその背から見るとも脅威であった。

幾度かのやり取りの後、またアイの姿が消える。

右か左か、それとも下か上か、はたまた背後からか。

綱は予測を立て、身構える。

しかし、その予測のいずれも当てはまりはしなかった。

アイが向かったのは、

「光様あ！」

光の元へである。

何と体の重い事か。

すぐるように綱は必死で駆けた。

アイは光の眼前にある。

そして、アイは光に背を向けた。

アイの本当の狙いは光では無かった。

捕らえるは取り乱した綱。

「ぐわあああ！」

アイの蹴りで綱は吹き飛び、壁を壊し、その外まで吹き飛ばされた。

そして、砂煙が巻き上がる中をアイが追った。

「綱あああ！！！」

返事は返っては来ない。

光は瞳に憎しみの炎を宿し、阿部を睨みつけるが、相手は薄ら笑うだけである。

そして、その視線を遮るよう大江が立ちはだかった。

「大江、どけ。そいつを斬る」

大江は金棒を担ぎ、光の元へ迫る。

「どけと言っている！聞こえないのか！」

一瞬ひくりと反応したと思ったが、結局は大江の金棒は振り下ろされる。

光は大江の攻撃を避けながら阿部へと向かう。

大元を倒せば、きっとアイも大江も正気に戻るはず。

しかし、そんな簡単には事は運ぶはずがない。

光の頭上に金棒が振り下ろされる。

寸での所で避けるが、地面が爆ぜ、その衝撃に光の体は後ろに飛ばされ尻もちをついた。

「きゃあああああ！」

忌々しいと大江を睨みつけるが、もうそこにはその姿はあらず、

大江は既に光の目の前で止めを刺そうと金棒を振りかぶっていた。

もはや避けるにしても受けるにしてもかなわない。

(これまでか・・・)

光は唇をかみしめ、自分を殺す相手を見上げる。

大江は泣いていた。

そして、金棒は振りかざされた。

決着

視界が悪いのは渦巻く砂煙のせいだけではなかった。綱は体中が悲鳴を上げ、痛みにつめきながらも体を動かそうとする。

既に意識を繋ぐだけでもやっとの状態。

(早く光様のもとへ)

その一念だけが綱の意識を現世に留めていた。

しかし、意志とは逆にもう体は立ち上がることさえ許さない。

そんな綱に近づく者がいた。

おそらくアイであろう事は綱にも分かった。

何とかもう一度体を引き起こそうとするが、すぐにアイに馬乗りになられ地面に縛りつけられる。

そして、アイの拳は固められた。

綱は何かにすぎるように手を伸ばす。

「アイ、すまぬ」

アイの動きが止まり、手の甲に何か温かいものが落ちた。

それが何なのか視界が白んで綱には判別できない。

飢えた獣のよだれなのか、それとも血の通った涙なのか。

綱は必死にアイを引き寄せようと空を掻き、アイの首に着けられた金環を手にする。

それから力任せに綱はその金環を引っ張る。

だが、アイの体は引き寄せられず、代わりに金環がまるで土くれで出来ていたのではないかと思うほど、もろく崩れ去った。

そして、それと同時にアイの拳が綱の額を打ち抜いた。

(これまでか・・・)

光は目をつむり、最期の時を待った。

しかし、すぐに来るはずであったその時は待てども来ない。

いぶかしがり、光は目を開く。

「貴方は?!坂田殿!?!」

光の目の前では坂田が大江の金棒を受けていた。

苦痛にゆがむ顔を必死で笑顔に変え、光に答える坂田。

「今の内じゃ!その鬼の首についておる環をはぐのじゃ!」

どうしてここに?と問う前に、後方から玉藻の声がぴしゃりと響いた。

訳も分ならず光はその言葉に従う。

手を伸ばす光に大江は当然のように蹴りを放つが、それを坂田が身を呈して守り、その動きを封じた。

そうして何とか光は大江の首の金環をはぐ事が出来た。

「これでこの鬼は次目を覚ます時には正気でいられよう。しばし休ましてやるがよい」

玉藻のその言葉を聞き、光は深く安堵の息を吐く。

そして、気を失った大江にまたがるとその頬をいい音を立て、平手で張り、叩き起こした。

「おお、光じゃねえか」

目を覚まし、素つ頓狂な声を上げる大江、その顔面をとりあえず光は殴り飛ばした。

それから「痛えじゃねえか!何すんだ!」と鼻血を垂らしながら訴える大江を放つて、光は坂田の元に歩み寄る。

「坂田殿、大事ありませんか?」

「ああ、心配ない。我が妻に比べれば鬼など子供と戯れるに等しいよ」

よくよく見れば坂田の体は全身傷だらけで、その言葉もまんざら嘘ではないように思える。

「さて、阿部の坊や。少々火遊びが過ぎた様じゃ。代償は高くつくぞ、観念するのじゃな」

「何故お前がここにいる?逆賊どもの鎮圧に向かわせたはずだが?」
来るはずのない客人に阿部は眉をひそめる。

「愛の力で復活と言ったところじゃな」

「戯言を」

玉藻の言葉は阿部の気に障ったのか、阿部の眉間のしわが一層深くなる。

「何故こうも私の邪魔をする。世界は病んでいるのだ。世界は私の手で救わねばならんと言うのに」

「救う？壊すの間違いではないのか。そもそもお前のそういう傲慢な態度が妾は気に入らん。この世界はお前のものなのか？神にでもなつたつもりか？」

玉藻は嘲り笑い、それを阿部も笑いで返した。

「神？そうだな。この世界を救うために必要なら私は神にでもなんでもなるう」

そう言うつと阿部はおもむろに衣を脱ぎ捨て、吠えた。

筋肉がメキメキと音を立て隆起し、膨れていく体。

変貌し、堕ちていく阿部の姿にそこにいた皆が息を飲んだ。

爪は鋭く伸び、獣の牙が口から飛び出ている。

皮膚は紅潮し、赤銅色をしていた。

爛々と輝くその瞳とは逆に、髪は白く生氣を失ったようである。

そして、その髪の間から見えるは四本の角。

「鬼の強靱な肉体に、私の聡明な頭脳。まさに神の如くか」

「阿部清明様、そのお姿は一体？」

皆が啞然とする中、光は幽鬼のように立ち上がり、阿部の元へと近づく。

「腐った貴族どもの娘よ。もはや私のこの姿は不完全なものではない。あの夜のように万に一つも命拾いする可能性はないぞ。お前をなぶり殺し、残る死にぞこない共を一掃してくれよう」

光の蒼白の顔の口端が上がる。

何と愚かな。

命の恩人と尊敬の念を抱いていた自分、阿部を信じたいという気持と信じられないという気持ちに葛藤していた自分、阿部に対し刀

を向けることにためらいを感じた自分、何もかもが愚かしく思える。所詮阿部の手のひらで踊っていたと言う事か。さぞ無様な道化であつたらう。

既に怒りを通り越して、光からは笑い声が漏れ出ていた。気が触れたかと思わせるが、転じて阿部を睨みつける瞳に映る力強さがそうではないと語った。

「なるほど。そうか。そのような鬼の姿でなければ、か弱い女一人も殺せぬ臆病者であつたか。それとも人の姿では事が明るみに出て、人心がその身から離れているのが怖かつたのか？」

「小娘が好き勝手……」
もはや光に聞く耳は持たない。

「世界を救うだと？片腹痛いな。そのような矮小な身で何ができる？貴様の自身さえ救えず、世界を呪う事しか出来ぬ。世界が腐っている？馬鹿な。腐っているのは世界を見ているお前の目だ。妄言、大言、空言、もう結構だ。貴様の兇戯に付き合うほど私は暇ではないのだ。大概にしろ」

阿部が激昂する。

「黙れ！」

「黙るのは貴様だ！！」

阿部の腕が光の頭をかすめ、光は飛び上がった。

大上段に構え、両断するつもりなのであろう。

阿部は余裕たつぷりに腕を掲げそれを受けた。

ぶつりと血筋が入る。

やはり光の力では阿部の腕にかすり傷を負わすのがやっと。

「何故鬼の体に傷が……」

しかし、阿部は流れるわずかばかりの血を見て動揺をする。

「いい忘れていたな。これは我が仇、四本の角を持つ鬼を屠るために作らせた刀。すなわちお前を屠るための刀だ。とくとその名を覚えておくがよい。鬼切りが刀、安綱だ」

安綱を構え、不遜な光の物言いに阿部は鼻で笑う。

ちろりと赤黒く長い舌で傷をなめた。

「宝の持ち腐れだな」

恐るるに足らずと阿部は判断したようだった。

そして、目の前のゴミを片付けようとした。

「?!」

が、体が動かない。

ぎよろりと目玉が動く。

「妾は言祝ことばいだはずだ。観念しろと」

「狐がああー!!!」

硬直した体を無理やりに動かそうと阿部がもがくと、見下した玉藻の笑みが歪む。

それを見た坂田が、玉藻の体をそつと支えるのである。

「大江！」

「は？」

探し求めた仇を前に光は叫んだ。

まだ意識ははっきりとは覚醒してはいない大江。

「力を貸せ！」

「・・・おう！」

寸分の差を置いて、大江はようやく状況を理解し、光の元に駆け寄る。

玉藻の表情がさらに険しくなるのを見るに、温厚な坂田も思わず「早く！」と声を荒げる。

大江の大きな手が安綱を持つ震える光の手を包んだ。

「これで終わりだ」

「おう」

「終わらせん。終わらせはせんぞ！」

さらにもがく阿部。

玉藻ががくりと膝をつき、ようやく阿部の体が自由を得た。

阿部の薙ぐ腕。

そして、光と大江の手によって安綱が振り下ろされる。

「はあああああー！ー！ー！ー！ー！」

「うおおおおおー！ー！ー！ー！」

「ごがあああああー！ー！ー！ー！」

三者の咆哮が響いた。

阿部の腕は届かず、鮮血の花が咲き乱れる。

緋に染まる視界の中、光は相手の最期の瞬間を見届けようと目を凝らす。

重い音を立て、四本の角を持つ鬼は倒れた。

両断された体からは血が流れ、地を朱の絨毯に染め上げていた。

もはや動く気配はない。

「終わったのか？」

そう大江が光に問いかけると、光は答えず、倒れ込む。

「おい、光！」

心配そうに大江は光を覗きこむが、光の方はと言うと安らかな表情で寝息を立てていた。

「ったく。無茶しやがって。そのくせ勝手に気を失って。文句のーつも言わせるってんだ」

「ならば頬を張って、叩き起こすか？」

そんな風に冗談めいて玉藻が言う。

あきれた表情で答える大江。

「馬鹿言うなよ。気を失っている奴にそんなことできるかよ」

そして、玉藻と坂田は顔を見合わせ、笑った。

大江は不思議そうにその光景を眺めるのだった。

それぞれの道

「あれから綱はどうしてる？」

「峠を越え、命にはもう別状ないが、今だ目を覚まさない」

「そうか・・・」

光の言葉を聞き、大江の表情が曇る。

大江の見送りに光と卜部の姿があった。

ただでさえしんみりしてしまうような別れに、努めて明るくとは思うが、綱の事を思うとそうもいかない。

「まあ、でも綱の事はアイに任せておけば安心だろ。ずっと付き添って世話してんだろ？あいつなら例えこのまま綱が目を覚まさなくても喜んで世話するぜ」

「悪い冗談だ」

「そうだな。悪い冗談だ・・・とは言い切れねえからな。実際。俺にしてみれば、あの傷で命があっただけでも不思議でならねえのに、正直このまま目を覚まさなくてもおかしくねえだろ？」

「それはそうだが・・・」

「それにだな。アイにしてみりゃ、自分で手を下したんだ。辛くない訳ねえ。なのにアイは怨み言の一つも言わねえ。だったら俺達もいつまでもこんな辛気臭い顔をしてる訳にはいかねえだろ？やっと全部終わったんだ。もつと楽しそうにしろよ」

「そうだな」と光の顔から笑みが落ちた。

笑顔にはまだ影が残り、腹の底から笑える日はいつの日かと、大江はため息を吐いた。

そして、遠くに広がる都の風景を見た。

争いの爪跡は大きい。

再び民に笑顔が戻り、都の賑やかさが戻るのはまだ先の事だろう。「そうだが。綱もきつとすぐに目を覚ますだろうし、これで万事丸く収まったって事でいいじゃねえか。納得できねえのはあのいけす

かねえ奴が英雄だつてことぐらいか」

「あれであの方人気がありますから」

と、卜部は大江に申し訳なさそうに言葉を濁す。

今回の動乱を妖怪どもの襲撃による混乱。

そして、阿部清明はそれらを命を賭して食い止めた英雄として、民には伝えられていた。

「その方が納得させやすいってのは分からんでもないんだが、そのせいで俺らの肩身が狭くなるのは勘弁してもらいたかったぜ」

「その件については碓井様も珍しく真剣に動いてくれたのですが、力及ばず、申し開きも無い」

深々と頭を下げる卜部に大江は慌てて両の手を左右に振った。

「いやいや、いいってことよ。あんたに謝られてもどう仕様もねえし。悪いのは鬼のせいにして何でも片づけようとしている奴なんだしな。むしろあんたには感謝してるんだ。あの野郎に操られていた鬼達の命を救ってくれたんだしな。あのまま放っておいたらどさくさにまぎれて口封じされていたに違いねえ」

「ですが、あの場で我らは貴殿の同族の命を多く奪っておりまして、謝罪こそすれ、感謝されるなど・・・」

「それもそうなんだけどよお」

大江は言葉に困って、頭をかく。

そんな大江を見て光はくすりと笑った。

「大丈夫だ、大江」

「何がだ？」

「世界がいかにか嘘で塗り固められようときつと最後には真実にたどり着く。この私のようにな」

「・・・そうだな」

大江の腹の底では、きつと人間の鬼達への偏見は無くならないだろうという諦めがあった。

けれど、光の純粹に真つすぐ見つめる瞳を見ていると、その言葉を信じたいくなる。

「大江・・・ありがとう」

「何でい。改まって。気持ちわりい」

照れくさそうにする大江に光は「しゃがめ」と命令する。

そして、その頬に光は口づけした。

「今回の一連の件の礼だ。とっておけ。元より天涯孤独の身。財はないし、安綱も献上の名目で取り上げられた。我ながら情けないが、もはやこの身一つしかない。命まで懸けてこのような事しかできなく、すまないとは思う」

大江は口づけされた頬を触れ、ぼんやりしている。

「何だ？やはり不服か？」

照れる光に大江は笑んだ。

「ああ。こんなんじゃ足りねえな」

そう言つと、大江は光を抱きあげた。

「つこら、何をする！」

「馬鹿、暴れるな！肩腕しかねえんだ。落とすだろ」

恥ずかしさからか、顔を真っ赤にして大江を容赦なく殴る蹴る光。

「じゃあ、こいつもらって行くから。悪いけど、綱が目覚めたらよろしく言つといてくれ」

「承りました。悪い鬼にさらわれたとでも報告しておきましょう」

「何を勝手に・・・」

「もしかして嫌なのか？俺と一緒にじゃ」

嫌かと問われて、光は口をつぐんだ。

数刻答えを待つも返つては来ない。

「では、お体にお気をつけて。良き旅路となる事を祈っております」

「そつちもな。これから大変だとは思うが、まあ、頑張ってくれや」

そして、卜部は去っていく大江達の背を見送ると都へと踵を返した。

「さては妖怪変化よりも厄介は人の世よ」

先を思いやり、卜部からは自然ため息が出るのだった。

それぞれの道（後書き）

これでこの物語はおしまいです。

ここまで読んでくださった方へ感謝と謝罪を。

ありがとうございます。

すみませんでした。

おまけ

まぶしい日差しが、薄く開けた瞳に降り注ぐ。
視界は白んでよく見えない。
温かな雫が綱の頬を濡らす。

「綱様あ」

振り絞るような声、頬ぬぐい、その指の隙間から見えた覗きこむ女。

その眼から涙が滴り落ちている。

外界をぼんやりと見ていた綱の思考は、突然覚醒する。

「光様！」

綱は体を起こそうとして、軋む体につめく。

「駄目です。無理をされては。綱様はもう五年も眠ったままだったのです。どうか、お体を動かさすなら徐々に」

「五年も寝ていた？・・・」

女は肩に手を当て、寝かそうとするが、綱はそれを拒否した。

「光様は！光様はどうしているのだ！」

「光様は綱様が気を失った後、無事仇を討たれて、大江さまと一緒にいずこかへ行かれました」

さみしそうに女が語る。

そして、綱は女の言葉を聞いて目を見張る。

「僕が行かなければ。光様の元へ」

立ち上がるうとして、痛みにつめき崩れ落ちる。

女はその背をさすりながら、言葉を漏らす。

「何で光なんだべ？」

綱が振り返ると女は涙を瞳にまた溜めていた。

「?!アイ・・・か？」

こくりとうなずくアイ、その姿は見間違えるほどに美しく成長していた。

けれども、赤い髪、鬼の角は依然としてあり、幼き頃の面影もある。

分からなかったのは、ただ綱の眼中になかったただけであった。

「綱様が目を覚ますまで今までずっとお世話してたんだべ。それなのに目が覚めた瞬間からずっと光様だべ。オラの事なんか気付いてもいなかったべ」

綱はアイにどう声をかけていいか分からず、その手はおろおろとさまよった。

「綱様のお嫁さんになるために色々お義母様に教わったんだべ。色々頑張ったんだべ。言葉遣いも頑張って直してもらったんだべ。頑張ったんだべ。でも、全然駄目だったべ。もう元の言葉遣いになっちゃってるし。オラ、全然駄目だべ」

アイはそう言って綱に振り向かず、部屋を出ていった。

結局、綱は何も言えずその姿を見送ることしかできなかった。

アイは戸を閉め、一步も動けずにいた。

上を向き、流れる涙を抑えようとすることも止めどなく流れてくる。

ぐしぐしと顔を拭き、せつかくあつらえてもらった服を汚す。

頭をよぎるのはこの五年間の記憶。

好きな男の傍にいられるとは言え、決して辛くない訳ではなかった。

もう二度と目が覚めないのではないかと絶望にくれた日々もあった。

手を下した自身を呪う綱の言葉で目を覚ました朝もあった。

それでも尽くしてきたのだ。

綱が目覚めた瞬間、アイの心は驚きと喜びと幸福に満ちていた。だが、それ故綱の光を求める声はアイをひどく落胆させた。

「どうかしたのですか？」

「お義母様……」

佇むアイに声をかける者がいた。

綱の母親である。

「綱様が目を覚ましたべ」

すぐにも綱の母は綱の元へ飛んでいきたい気持ちになったが、どうにも愛の様子がおかしい。

「何かあったのね？」

アイはこくりとうなずき、綱の母の胸元へ飛び込み、声を上げ泣きだした。

「綱様が、光様の方がいいって・・・オラの事なんて気付きもしないで・・・うわーん」

綱の母はアイの頬に流れる涙を拭い、優しく声をかける。

「だから常々言っていたでしょ？」

「ふへ？何をだべ？」

「あの子が寝ている間に襲ってしまえと」

「うっ。だって、そう言うのは、やっぱり二人の同意が無いと駄目だべ。愛し合う二人が、っというか、へへへ」

軽く妄想に浸っているアイの頬を綱の母は容赦なく引っ張る。

「ほはあはま、ひたひへ」

「そんな甘い事を言っているからつらい目に会うのでしょ？何なら今から何処かから赤ん坊を連れて来て、これは私と貴方の子なんですとでも言っておしまいなさいな。でも、それも嫌だっていうんでしょ？」

「だって。だべ」

綱の母は腰をかがめ、しゃがみこんだアイと視線の高さを合わせる。

「アイちゃん、何故鬼の貴方をこの家に置いておくことを許したと思っ？」

「うっ、分かんないべ」

「あの子の事を必死に看病するアイちゃんを見てきたからよ。この五年間、あの子の世話をしてきたのは誰？光様？違っでしょ？もっ」と自信を持ちなさい」

綱の母はアイの肩に手を置き、優しく微笑んだ。

「ありがとうだべ。お義母様」

「ところで言葉遣い、元に戻っていますよ」

「ご、ごめんなさい・・・だべ」

綱の母はため息をつき、アイは照れ隠しのように頭をかいた。

「じゃあ、さっさと行ってきなさい」

「ふにゃ」

そして、綱の母はアイの首根っこを掴み、綱の部屋にアイを投げ込んだ。

「母上!？」

「頑張るのよ!アイちゃん!」

呆然とする綱を放って、綱の母はアイに声援を送り、ぴしゃりと戸を閉じた。

気まずい沈黙が二人を襲った。

戸を一つ隔てただけである。

その会話がもしかしたら綱にも聞こえていたかもしれない。

そう思うとアイは距離を詰めることはおろか、視線を交わすことすらままならなかった。

「すまない。長い間僕はアイの世話になっていたのだな。ありがとう」

綱の気遣いがアイの心をちくちくと痛めつけた。

「綱様はどうしても光の元に行かなきゃならないだべか？」

「ああ。でも、こんななまっただ体では、光様の元へ馳せ参じたところで何の役にも立たないだろう。けれど、僕は行かなくては」

「綱様は光が好きなんだべな」

「そつだな・・・」

そう言っつて綱は天井を見上げ、懐かしい思い出にふける。

幼き頃、泣いていた自分に『家来にしてやる』と宣言した光の威風堂々とした姿。

「僕にとつて光様は好きとか嫌いとか言う領域ではないな。命をかけて守る、そういう相手なのだな」

思えばあの頃からずっと付き従ってきた。
今更その生き方を変えるつもりはない。

「じゃあ、綱様にとってオラはどういう相手なんだべ？」
聞かれて、綱はアイを見る。

瞳を涙でうるませ、すぎるように見てくる様はいじらしささえ感じる。

一昔前、好きだ好きだと迫ってくるときには感じえなかった艶もある。

「それは・・・」

と言い淀み、綱はアイと視線をずらす。

アイは手を重ね、自分の顔を綱の視線の先に持っていく。

そして、瞳を閉じた。

「ちよ、ちよっと待て。アイ。冷静になれ」

「もう五年も待ったべ。これ以上待つなんて、綱様残酷だべ」

「う、うわああ」

そして、綱はアイに押し倒させるのである。

「もう綱様を失うのは嫌だべ」

綱の胸の中でうずくまり、アイは呟く。

綱は瞳を閉じ、そっとアイの頭を撫でるのであった。

設定資料らしきもの

時代は平安時代っぽい感じ。

光・・・モデルは源頼光。頼光は酒天童子退治や土蜘蛛退治で有名。本編では女性として登場。性格は生意気。時折芯の強さやもろさを垣間見せるが、ちゃんと描かれているかは作者の力量がないので不明。

大江・・・モデルは酒天童子。

隻腕なのは後に紹介するアイのモデル、一条戻り橋の鬼を混ぜてるから。性格は大雑把。だが、その一方で他人に気を使う一面もある。でも、大体報われない。ある意味で登場人物の中で一番女らしいのかもかもしれない。

安綱・・・刀、モデルは童子切り。

安綱は刀工の名であるが、刀の名として使用。理由はなんとなく。後に綱が登場するので、ややっこしくなる。失敗したと思う。

綱・・・モデルは忠犬八千公、ではなく渡辺綱。渡辺綱は頼光の四天王の一人。他の四天王は坂田金時、卜部季武、碓井貞光の三名。美少年に犬耳は似合うと思う。どうでもいいな。性格は従順で、まっすぐ。それゆえ少し頑固なところもある。

アイ・・・モデルは茨木童子。茨木童子は渡辺綱に腕を切られてます。

最初は普通の女の人だったが、いつの間にか幼くなってしまった。「くだべ」が少しうっとおしいなあと書きながら思っていたが、このアホっぽいところがアイなんだなと自分に納得させる。とりあえ

ず綱が好き。

膝丸・・・童子切りもそうなのだが、刀の名前が変わったりする。この膝丸も蜘蛛切、吠丸、薄緑と名を変えている。本編では吠丸を膝丸の影打ち（影打ちとは、良いものを納める為に、同じ物を二振り造り、その一方を納める。その際の納められなかった刀の事）として名を挙げている。

坂田金時・・・モデルは金太郎飴。ではなく、そのモデルになった坂田金時という人物。金太郎さんと聞けば幼いイメージがあるが、玉藻と一緒にするため大人に。怪力でいい体をしているらしい（玉藻談）

玉藻・・・モデルは玉藻前。白面金毛九尾の狐、または二尾の狐の化けた絶世の美女とされている。酒天童子、崇徳の大天狗と共に日本三大悪妖怪にされてるらしい。ここに書いて思い出す。天狗出してないなあ。まあ、いいや。坂田と一緒にしたらおもしろいかなと思っただが、暴走した。旦那の裸を見せたがるって、他人の子供が映ったホームビデオを見さされるような感じだろうか。いや、もっとひどいか。

ああ、後この歌だが。

わが背子^せが 来^くべき宵なり ささがにの くものふるまひ かね
てしるしも

衣通姫

古今和歌集にあるらしい。能の土蜘蛛の演目で上の句が読まれるら

しいので使った。意味は「わが背の君の来るべき宵ね、蜘蛛の巣作りの振る舞い、予ての兆しよ」な感じらしい。ここでの蜘蛛は吉兆の虫として歌われている。

阿部清明・・・モデルは安倍晴明。言わずと知れた陰陽師の有名人である。陰陽師と聞けば、魔法使いの様なものをイメージするが、実際はその当時の最先端の科学者であるともいえる。まあ、今の時代でも進んだ科学は魔法のようでもあるが。

本編での阿部は話を聞かない人。噛み合っているようで、一方通行なので話を進めやすかった。

碓井貞光うすいのみつたけ・・・童話の金太郎では、足柄山にいた金太郎の才覚を見出し、源頼光の元へと連れて行ったらしい。

基本的にやる気が無い人。性格はある意味で阿部清明と似てはいる。違う点と言えば、阿部が自分で何とかしようと思うのに対して、碓井は他がやればいいと考えが根底にある事であろう。どうしようもないから自分がやっていると言う極めて後ろ向きな人間である。実力はある。

ト部季武うべのすえたけ・・・頼光四天王の一人、色々妖怪退治で有名ならしい。

本編では碓井の片腕として登場。ト部自身も実力があるのだが、幼少の頃に碓井と出会い、その実力に心酔。それからやる気のない碓井を何とか頑張らせようとする苦勞人である。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0873n/>

鬼奇譚

2010年11月22日19時10分発行